燐光群上演台本

最後の一人までが全体である

作　坂手洋二

〈登場人物〉

ナカヤマ
フジタケンイチ
タケダ(2002)
ミヤギアツコ(1987)・イノウエアツコ(2002)
ユキエ
セツコ(2002)・ナカヤマの妻(1987)
トミ(1987)
タチバナ(1987)
ヒラオカ(2002)・男(1987)
サリフ(1987)・アットモ(2002)
ヒロコ(1987)・また別なヒロコ(2002)
ハルヤマ(2002)
アンドウ(2002)
カイ(1987)
セノオ(1987)
サワダ(1987)
ハセガワ(1987)
タナカ(1987)
ワタナベ(1987)
フミ(1987)

クボ(1987)
トシコ(1987)
ヒトミ(2002)
キヨミ(2002)
ノガミ(1987)
大学祭の連絡係(1987)

※　劇場の誕生　※

じっさいにどこなのかは、特定される必要はない。
ただの空間。
しかしそこが劇場と呼ばれる場所であるなら、仕方ない。
なるべく無防備でありたい。
劇場のように見えない方がいい。
けれど客席と呼ばれる場所から舞台と言われている場所を大勢の人が見ている、という状態になってしまったら、やむをえない。
客席扉のみならず、通常、搬入口と呼ばれる扉も含め、なるべく多くの扉を、あらかじめ開け放しておく。
「演劇用」の照明を点灯せず、劇場の日常の照明(ハウスライト)のみがついているように。
当分は客席の照明もついているままでよい。
客席でアナウンスはしない。
俳優ではない誰かに頼んで、客席の端から反対側の端にいる誰かに声をかけてもらう。
「なんか、始めるみたいだから、音が鳴る物持ってたらスイッチ切っといてくれって言ってたよ。……あ、トイレ今のうちに行っといてって。うん、二時間ちょっとみたい。え、待ってよ。ごめんごめん」
そんなことを言いながらその人はどこかに去っていくだろう。
観客が座っていない広い空間には、何も置いていない。
観客は客席に着く前、そこを通って来ることになっているのが望ましい。

客足が止まる。
……ほんとうに何もない、誰もいない空間。
ナカヤマが来る。
続いて、フジタが来る。

ナカヤマ　からっぽだ。
フジタ　……。
ナカヤマ　いいなあ、からっぽって。
フジタ　……まあ。
ナカヤマ　からっぽだが、ここに大勢の人間を集めて、締めきって、照明をつける。そうして、誰かが出てきて、何か喋る。……うん。ここが舞台か。
フジタ　ええ。
ナカヤマ　(舞台端の線を示す)ここからこっち。
フジタ　そうですね。
ナカヤマ　これつけてみよう。……つくかな。

ナカヤマ、照明器具を一つ持ち込んで、それをつける。

ナカヤマ　なんか、芝居みたいだねえ。
フジタ　ということになるんですか。
ナカヤマ　君が演出家。
フジタ　演出家という人間はどこにもいません。ある場所に時間と空間を創りあげていこうとすると、ある人間がある瞬間、ある役割を果たしている。誰かの目にそ

う見えることがある……。
ナカヤマ　そこに舞台がある。そして舞台を作る人間がいるだけだ。
フジタ　……。
ナカヤマ　中に入れてみよう。

間。
やがてナカヤマとフジタ、二人で畳を運んでくる。
運びながら、

ナカヤマ　君の芝居はアングラなの。
フジタ　自己規定はしません。
ナカヤマ　じゃあ、新劇。
フジタ　違います。いえ、どう見えるかはわかりませんが。
ナカヤマ　……いや、芝居のことはよくわからないんだけど、アングラって、やっぱり、テント張るだろ。野外劇とか。
フジタ　そういう人多いですね。
ナカヤマ　ここは劇場と言っていいのかどうかわからないし、まあ、ここでやってくれるぶんには、ありがたいんだけど。学生会館は、金もかからんし。セットはよそでやってたのをそのまま持ってくるんだろ。
フジタ　ちゃんと照明吊ったりすると、架設になりますから。
ナカヤマ　金かかるの。
フジタ　まあ。トラス組むより角(つの)出せば、そんなでもないかな……。
ナカヤマ　東京ではどんなところでやってるの。

フジタ　下北沢のスズナリっていって、まあ、最近小劇場のメッカって言われてるんですけど。

ナカヤマ　へえ。

フジタ　もともとアパートだったのを劇場に改造したんです。楽屋とか事務所はまんまアパートです。タッパがもう少しほしいんですけど、もともと俳優だった社長のホンダさんが、舞台部分の床を掘り込んで、一メートルくらい高くしてくれるっていう話なんです、来年あたり。

　　二人、畳を組み合わせて、四畳半の形に敷いてしまう。

ナカヤマ　ちくしょう。

フジタ　……。

ナカヤマ　相談したわけでもないのに四畳半が出来上がってしまった。これは内なる制度のなせる業だ。……自己批判。

フジタ　まあ、四畳半の芝居ですから。

ナカヤマ　台本は。

フジタ　……今、書いているんです。

ナカヤマ　もうすぐじゃないか。

フジタ　書き直してるだけです、大学祭用に。

ナカヤマ　四畳半を牢獄にするという芝居だろ。

フジタ　……まあ。

ナカヤマ　独房は三畳だよ。

フジタ　知ってます。

ナカヤマ　ほう。

フジタ　入ったことありませんけど。

ナカヤマ　なぜ人は四畳半に住む。なぜこの形を受け入れる。なぜこの広さを許容する。しかし敢えて身を投じてみる。それはつまり「制度」を批判するために自らがあえて「制度」の中に身を置いてみる、そういう発想だろう。

フジタ　……。

ナカヤマ　嫌な観客だな。初めから仕掛けがわかってる。

フジタ　もう一つ仕掛けがあります。

ナカヤマ　うん。

フジタ　日本の家にはたいてい四畳半があります。だから四畳半を敷いただけのセットにしておくと、登場する人間を変えるだけで、日本じゅうのありとあらゆる四畳半に、場面を飛ばせるんです。

ナカヤマ　田舎に四畳半は少ないぞ。地方の平屋建て日本家屋は小さくて六畳単位だ。

フジタ　都市生活者の話に傾くかもしれません。

ナカヤマ　地方大学で上演する芝居が東京一極中心じゃ困るよ。

フジタ　東京と反東京を往還させます。

ナカヤマ　もしも今、こうして俺たちが話してるのも芝居の中で、そういう、これから上演する劇の仕掛けをファーストシーンであらかじめ喋っちまったとしたら、身も蓋もないだろうな。

フジタ　そういう芝居はあります。

ナカヤマ　ほう。

フジタ　これは演劇だ。我々は俳優で、舞台でこのように劇を演じてみせますと、あらかじめ語ってみせる芝居です。メタシアターっていうんです。僕は嫌いです。

ナカヤマ　舞台空間は、俳優によって独占されるべきではない。
フジタ　ええ。
ナカヤマ　クク……。
フジタ　……。
ナカヤマ　偶然だが、俺も四畳半をつくった。
フジタ　……なんです。
ナカヤマ　劇場でも稽古場でもない。ただの四畳半。ただし牢獄にするつもりはない。
　純粋四畳半。
フジタ　……。
ナカヤマ　来てみるか。
フジタ　ええ。

　ナカヤマ、去る。
　追うフジタ、足を止める。
　いつしか舞台上に現れている、タケダ。
　少し足を引きずっている。
　自分で持ち込んだ小さな机と椅子。
　その椅子に腰掛ける。

タケダ　それがその教官との出会いだったわけだ。
フジタ　ええ。その前に打ち合わせに来たときは、まだ大学祭の実行委員会の連中に
　しか会っていませんでしたから。
タケダ　教官、と君は言ったが、その時彼はもう教職を解かれていたんだろう。

フジタ　懲戒免職処分を受けてから十五年めでした。
タケダ　うん。
フジタ　なのに彼はまだ大学の職員宿舎に住んでいました。
タケダ　……。

　この間に、カイ、ハセガワ、フミ、タナカら、学生たちが出てきて
　いて、四畳半上、あるいはその周囲の舞台に自分の位置を決める。
　タケダ、机に向かい、本を開き、読み始める。

※　Rd棟４０３号室　※

カイ、ハセガワ、フミ、タナカ、話している。
四畳半ではないまた別な場所に、ベビーベッドと、身重のヒロコ。

フミ　なんで芝居呼ぶことになったの。
ハセガワ　なんでって。
フミ　ここの大学祭は、客寄せにタレント呼んでるそのへんの学園祭、否定してきたわけでしょう。
カイ　タレントじゃないだろう。
タナカ　聞いたことない劇団だよ。
フミ　かえってよくないよ。
ハセガワ　まあ、劇団主宰者とか、一部のスタッフが地元出身ということもあってね。
タナカ　委員長と高校、同級なんだって。
カイ　そうだけど。
フミ　学生劇団。
カイ　俺は八回生。向こうはとっくに卒業してる。
タナカ　出すんだろ。金。学友会費の大学祭資金の中から。
カイ　四十万。
フミ　全部で。
タナカ　(考えて)それじゃ電車代にもならないんじゃない。二十人以上いるんだろ。
カイ　トラック一台で来ると言ってる。国鉄、ＪＲだっけ、そんなのは乗らない。飯もオール自炊。奴らのエンゲル系数はたぶん一日二百四十円の寮食より低い。

ナカヤマ、入ってきていて、玄関辺りにいた感じのフジタを押し込み、

ナカヤマ　貧乏座長だ。(フジタに)好きなとこ座って。
カイ　おう。
フミ　やだ……。(いたなんて)
フジタ　フジタです。お世話になります。
タナカ　……僕たち、今回の上演には賛成なんですよ。劇中に昭和最後の日、出てくるんでしょ。タイムリーだと思って。
ハセガワ　まあ、そろそろだから。(その日が来るのが)
タナカ　腸の手術で入院したからね、天皇。
フジタ　初の沖縄訪問を中止するためのエクスキューズかもしれません。
ハセガワ　膵臓ガンて噂もある。

入ってくる、ワタナベ、アツコ、セノオ。

ワタナベ　大事な話って、なんですか。
タナカ　実行委員会じゃないの。
カイ　学友会総務とほとんど重なってるけど、今日は有志の会合だ。
ワタナベ　バラバラに呼ばれたわけですけど、ほとんど寮生ばっかりですね。
カイ　寮生委員会にも関わる話だ。
ワタナベ　どうして寮で話さないんです。
カイ　「四畳半」を使わせてもらうように、俺が頼んだ。

ワタナベ　なぜ。
カイ　寮の会議室は誰でも入ってこられるだろ。
ワタナベ　スパイがいるっていうんですか。
カイ　微妙な話、多いから。

　　フジタ、タケダに話しかける。
　　異空間にいるタケダの姿や声は他の者には認識できない。
　　フジタの話しかける声もタケダ以外の者には聞こえていない。

フジタ　ナカヤマ教官の住居Ｒｄ棟４０３号室は、合い鍵を持つ者が十名をくだらない解放空間でした。中でも、とくにこの四畳半は、あいていれば誰がどう使ってもいいフリースペースとして機能していました。
タケダ　……ふだん部屋の中は何も置かず、空っぽにしてある。
フジタ　ええ。
タケダ　同じだね。
カイ　……始めましょう。
フミ　狭くない。
ナカヤマ　「座って半畳寝て一畳」。半畳に一人、ちょうど九人だ。
カイ　じゃ、ぼちぼち……、先にすませときたいのは、インドネシアの留学生が入寮を申し込んでいる件ですが。
アツコ　これだけで始めるんですか。
カイ　たぶんこれだけだと思うよ。
セノオ　西山寮って、外国人いたことあるの。

ハセガワ　聞いたことないなあ。
タナカ　インドネシアってどこだっけ。
ワタナベ　アジアの中では西南かな。
タナカ　島なんでしょ。
ワタナベ　うん。
タナカ　どのくらいの大きさ。北海道くらい。
ワタナベ　馬鹿いうなよ。インドネシアは何万かの島の集合で、海域も入れれば北米と同じ面積がある。
タナカ　バリって、近くだよね。
ワタナベ　バリもインドネシア。よく大学入れたね。
ハセガワ　どんな人。
カイ　工学部の院に来てるみたいなんだけど。
セノオ　どうして急に寮、入る気になったの。
カイ　ホームステイ先とうまくいっていないらしい。
ハセガワ　えー。
セノオ　外国人のホームステイ受け入れオーケーしても、白人じゃなかったらがっかりして邪険にする人、たまにいるっていうよ。
ハセガワ　……どの国の留学生かは問題じゃない。本学の学生が困っている以上、入寮を歓迎すべきじゃない？
カイ　異議なし。
皆　（口々に）異議なし。
カイ　では次回の寮生会議で正式に決定しよう。
フジタ　決定って、寮生が決めちゃっていいんですか、そういうの。

カイ　そうだよ。
ハセガワ　自主管理・自主運営だから。
タナカ　当局は否定してるけどね。
カイ　もともと西山寮は改築か新寮建設という話が進んでた。ところが大学当局と交渉が難しくなってきたら、先方は新たな学生の入寮を禁止してきた。
セノオ　新入生には合格通知と一緒に、入寮者への罰則を書いた恫喝文書を送り付けてる。
タナカ　寮生による自主募集も認めない。
ハセガワ　実質的な廃寮の動きです。
カイ　寮食堂従業員の雇用条件アップに成功したばかりなのに。
タナカ　我々は白紙撤回を求め、新入寮生を獲得し、反撃に打って出ようとしているわけ。
ナカヤマ　しかし一般学生の関心は薄い。
ハセガワ　それはちょっとむなしいけど。
ナカヤマ　寮の自治に無関心な学生たちのために、君たちはどうして学園祭をバックアップしなければならないのか。
セノオ　……一般学生は祭りを楽しみたいだけだ。
ハセガワ　ああ……。
ナカヤマ　今日はそっちの話じゃない？
カイ　前回の話では、大学祭実行委員の立候補者が定数に達しないのは一般学生の「責任性」に問題があるからだとして、論理的には、学友会は大学祭の中止を決定せざるをえないという方向になってました。もちろん多数の委員が中止を望んでいるわけではない。今日はその……。

フジタ　ちょっと待ってください。大学祭がないんですか。
ナカヤマ　紛糾してるところだ。
セノオ　聞いてないの。
フジタ　今日着いたばかりです。
カイ　かいつまんで言えばね、幾つかのサークルが、会議に出ない、ゴミ掃除をしない、管理が杜撰であるということで、一昨年の大学祭の前に、一度は全学生総会で開催決定したものの、付帯条項として会議参加、ゴミ掃除の徹底が加えられたわけ。しかし翌年、去年のことだけど、それが果たされなかったと判断されたため、本来なら去年に続いて今年も中止にすべきだということになった。
セノオ　それでもやりたいというから話を進めてる。
タナカ　今年もね、実行委員会に顔も見せない連中がいるんだ。
ハセガワ　返答のない団体、指針を文章化しない団体は認めるわけにはいかない。
セノオ　昨年の大学祭がなぜ崩壊したかに対する総括が欠落している。
タナカ　変わらないと思うよ、あいつらは。
フジタ　……じゃあ、大学祭をやらない可能性もあるということですね。
ナカヤマ　君は我々のレジュメをちゃんと読んでるか。君たちの演劇上演は〈非〉大学祭企画と書いてあるだろう。
フジタ　ええ。
ナカヤマ　だから大学祭の有無と、劇の上演は関係がない。
フジタ　〈非〉大学祭というのは、今回の大学祭の、一種の反語としてのキャッチフレーズだと思ってました。
カイ　それはそうなんだ。
ワタナベ　「ひ」ってなに、「ひ」って。

フミ　非・アンチ・あらざるものとしての大学祭。

セノオ　つまり、与えられた大学制度の中に位置づけられた祭りを、我々の主体性の祝祭として奪還する。

ワタナベ　えぇ？

アツコ　二枚舌だと思う。

ナカヤマ　劇はやる。

カイ　独立した学友会の企画だから、理論上。

アツコ　つまり演劇を、学園祭が中止になっても〈非〉大学祭は敢行したと既成事実を残すための道具にしようということですか。

フミ　そんな言い方って……。

タナカ　……女子寮はまとまってないの、意見。

ナカヤマ　今年からの委員もいるから問題を明確にしてくれ。

アツコ　じゃあ新しい人のために、ナカヤマさんの立場もはっきりしてほしいんですが。

ワタナベ　（「今年からの委員」「新しい人」が）僕のこと。

ナカヤマ　（同時に）私が学生でないことが問題か。

アツコ　そうは言ってません。今発言しているのは学友会の事務員としての立場ですか。個人ですか。

ナカヤマ　私は学友会の嘱託事務員だ。君たちに雇われている。大学の中で雇用された私が、大学の自治に関わる個人の立場で大学祭実行委員会に加わっている。

アツコ　では学友会の立場であなたが不利益を被っても、正しいと思うことには賛同する？

ナカヤマ　正しいかどうか決めるのは誰だ。

アツコ　……。

ナカヤマ　自治こそが大学が大学足りうる根拠、必然。私が言っているのはその原則だ。君たちは学ばなかったのか。正しさを競うことで人間が何をしてきたか。

アツコ　……。

ナカヤマ　この部屋の中で党派を巡る話はしたくないと決めていたから言いにくいが、十五年前に死んだ寮生コスヤタカオ君、大学祭実行委員だった彼は、二十余人の鉄パイプによる殴打、その後はクルマで何度も轢くという虐殺を受けた。彼は自己批判を要求されるようなことをしたか（もちろんしていない）。自己批判を拒否し抜いて死んだ。あれは断じて内ゲバなどではない。虐殺だ。まず知ってほしいのは、寮の自治を守り抜いた、そういう先輩たちがいたことだ。

セノオ　……投げたらあかん。

タナカ　やるしかない。

アツコ　最初は私、その話に感動しました。

ナカヤマ　……。

アツコ　昔と違うのは、二年連続で学園祭が実施されないとすれば、ナカヤマさん自身のお尻に火がついてしまうってことでしょう。

ナカヤマ　ほお。

アツコ　体育会サークルが学友会を脱退しようとしている動きはご存じでしょう。

セノオ　奴らにそんな力はない。

ナカヤマ　私は私自身の話をしていない。

アツコ　そうでしょうか。少なくとも他人の人生を、自分の運動のところに引き寄せてるじゃないですか。皆さんもおかしいと思います。寮には寮の歴史がある。けどこの大学にナカヤマさんがいなければ、ナカヤマさんが事務員をしている学友会が大学当局と対立していなければ、あなたがたが大学祭をやるかやらないかを議論

するなんてこと、考えられなかったはずです。
タナカ　悩まずお祭りを楽しんでいる？
ハセガワ　それを是非で捉えるのか。
セノオ　それは学友会総務に対する侮辱だよ。
アツコ　だったら法経学部会のビラに抗議しなさいよ。総務委員は無能・無気力で嘱託員ナカヤマの傀儡・操り人形って書いてある。
セノオ　あいつらのビラは下劣だ。ナカヤマ教官のプライベートにまで言及している。
タナカ　抗議していいですよ。たけしだってフライデーに殴り込んだんだ。
アツコ　このあいだも学友会事務室に向けて、何者かがナカヤマ、ナカヤマと連呼して投石、ガラス二枚を破損した。
ナカヤマ　何が言いたいんだ。
アツコ　一般学生と乖離したたたかいじゃ勝ち目はないってこと。
ハセガワ　そんなにズレがあるのかな。
アツコ　内側ばかり見た議論、してるんじゃないですか。
フミ　どうして。
アツコ　さっきのインドネシアの人のこと、名前も知らないで話してるのはヘンです。
タナカ　外国に話、飛ぶの？
カイ　ヘンっていったって、知らないんだからしようがない。
アツコ　名前も知らない、会ってもいない人のことを入れるの入れないのって、それは個人に対する態度じゃなくて、廃寮阻止運動にとって都合がいいからじゃないですか。
カイ　アジアとの連帯は大学祭の基調にも入ってる。
セノオ　どういう個人かで入れる入れないを決めるわけじゃない。原則だよ。
アツコ　その人のことが原因で問題が紛糾したら、廃寮の動きも早まるかもしれない

じゃないですか。
ナカヤマ　正式に廃寮通達が出ても、君たちは出ていかなければいい。それだけだ。
タナカ　不法占拠。
ナカヤマ　教職を追われた私が現に十五年、この教員宿舎に居座っている。
カイ　もともと廃寮を決められることじたいがナンセンスなんだ。
ハセガワ　そうだ。
アツコ　それって、ナカヤマさん寄りに考えすぎてない。
タナカ　こういう話になると必ずそれを言い出す人いるね。
フミ　あんたは一人党派を気取ってるのかもしれないけど、どの問題も広く浅くで本質に斬り込んでいないのよね。
アツコ　何でも反対バカ？
フミ　あなたは自分自身の論理を展開していないじゃない。
タナカ　だいたいね、その外国人に会ってどうするわけ。
アツコ　どうもしない。けど事情があるでしょう。もしも彼が、ただ教育を受ける以外の活動に関わっていることを問題視されたら、学資や生活費を絶たれることになりませんか。
セノオ　そりゃわからんよ、外国のことだ。
ハセガワ　インドネシアは貧しい。けどそういう国から日本に来られるんだから、外国人ったって俺たちよりよほど金持ちかもしれんな。
セノオ　私費留学だとしたらね。
フミ　いろいろ奨学金もあるんじゃない。
タナカ　外国人のことは関係ないよ。
ワタナベ　……さっきから聞いていたら、外国人外国人て、なんですか。

タナカ　なに。
ワタナベ　日本は都合のいいときだけアジアの仲間、ちょっと距離を置いて言うときのアジアというのは、自分たちが入っていない国々のことでしょう。恥ずかしくないですか。
セノオ　自分はどうなんだ。
ワタナベ　僕は恥ずかしい。指紋押捺拒否闘争に参加しないでいることが恥ずかしい。留学中、韓国の公安に逮捕された朴さんの奪還闘争を貫徹できなかったことが恥ずかしい。
カイ　なんだ。
ワタナベ　社会問題研究会は中曽根が自民党の研修会で「アメリカには黒人・プエルトリコ・メキシコ系などがおって知的水準が相当に低い」と発言したのに対して抗議のタテカンを出したけど、日本全体が白人と同じ視点の差別意識にどっぷり浸かっていて、しかもその自覚がない。そうでしょう。
セノオ　おまえにそんなこと言われる筋合い……。
ワタナベ　帰ります。
タナカ　ワタナベ。
セノオ　おい。

一同、口々に止めるが、ワタナベ、去る。
ヒロコの傍で赤ん坊が泣きだす。
セノオ、ワタナベが置いていってしまった鞄を手に、困惑する。

カイ　……いいよ、追っかけるな。
ハセガワ　どうせ同じ所に帰るんだ。

フミ　どういうこと。
タナカ　俺、なんか悪い?
ナカヤマ　ワタナベの言うとおりだ。俺も恥ずかしい。
セノオ　なんでです。
ナカヤマ　少なくとも六十年代まで、インドネシアの日本留学生は、インドネシア政府から奨学金を受け取っていた。
ハセガワ　なあんだ……。
ナカヤマ　その奨学金は、日本がインドネシアに払った戦後賠償から出ていた。……侵略戦争の罪滅ぼしに、日本に来ていただいた。そういう枠だ。
タナカ　そんな……。
セノオ　ちくしょう。

セノオ、ワタナベの鞄を手に、駆けるように去る。(ワタナベを追う)
ヒロコ、赤ん坊を抱いて、あやしながら出てくる。

ヒロコ　あんたたち。そこの四畳半でなにやろうとけっこうだけど、子供寝てんだから。
ハセガワ　……はい。
タナカ　すみません。
ヒロコ　(赤ん坊に)ほんとにもう、騒がしいったらないでちゅねー。
ナカヤマ　そういうあやし方じゃ駄目だって言ってるだろう。
ヒロコ　駄目じゃないわよ、あんたのやり方に慣れちゃっただけで……。
ナカヤマ　貸して。

　　ナカヤマ、ヒロコから赤ん坊を奪うようにして抱えると、そのまま別室へ行く。
　　ヒロコ、追う。

フミ　……決めるなら早いほうがいいんじゃないですか。大学祭実施するかどうか。

タナカ　じっさい始まったら最後、どっかのサークルがルールを守らなかったとしても、途中やめできないんだから。

カイ　それはそうだけど。

ハセガワ　なんで今日ここにみんな呼んだの。ほんとはナカヤマさんの意見？

カイ　相談はした。

フミ　スパイなんているの？

タナカ　踏み絵か。

カイ　なに。

タナカ　幹事中枢メンバーの結束を確かめる。

フミ　ここに来るかどうかでわかるの。

ハセガワ　（苛立って）しょっちゅう来てるよ、俺は。

フミ　……。

タナカ　ここに来たら「ナカヤマ派」ってことになるのかな。

ハセガワ　やめてよ。

アツコ　（ほぼ同時に笑う）

カイ　俺たちナカヤマさんに踊らされてるわけじゃない。

タナカ　俺だってやだよ。けど裏じゃそう呼ばれてるんだ。

ハセガワ　……知ってるよ。

フジタ　いつもこんなふうにやってるの。

カイ　まあ。

フジタ　たいへんだな。

カイ　うん。

フジタ　中止は困るよ。

カイ　わかってる。

フジタ　俺たちも学園祭で上演するの初めてだから、気合い入ってるんだ。

カイ　中止は絶対ない。

アツコ　絶対って言った？　今。

カイ　俺はやりたいんだ。

アツコ　そう。

カイ　ナカヤマさんの問題じゃない。去年大学祭を中止した責任は、委員長の俺にもある。

アツコ　あなた一人の判断じゃないでしょう。

カイ　……先週から学生部は、全サークルに「学友会の正常化についての資料」っていうのを配ってる。

ハセガワ　正常化って、いまが異常なのか。

カイ　大学祭がないってことはその理由づけとして大きなものになる。大学当局の動きを察して、反ナカヤマ勢力に鞍替えするサークルも出てくるだろう。

タナカ　新聞会と映研はそんなことないよ。

ハセガワ　大学祭かナカヤマかの選択じゃない。

カイ　学生はどんどん入れ替わっていくけど、嘱託事務員は同じ人間がやってる。最初は教えてもらうことばかりだし、ある程度ナカヤマ流のトーンに引きずられる

のは当然だ。……けど俺は今年、やりたいんだ。

ハセガワ　(自分も)やるべきだと思ってる。

フミ　どうしてはっきり言わないの。

カイ　二年連続中止ってことになると、この大学から未来永劫、大学祭ってものがなくなってしまうかもしれない。

アツコ　そこまで話広がるなら、ちゃんと会議開いてほしい。

カイ　……そうだな。

タナカ　うん。

ハセガワ　そうしよう。

アツコ　決まり。

アツコ、すっと立ち、そのまま去ってゆく。
赤ん坊を寝かしつけたナカヤマ、戻ってくる。

ナカヤマ　どうしたの。

カイ　ちょっと、人数揃わないんで、今日は解散ということで。

ナカヤマ　そう……。そうか。

皆も立つ。

ナカヤマ　(フジタに)事情が飲み込めてないところがあるようだから、今までのレジュメを渡そう。

フジタ　はい。

カイ　(ほぼ同時に)今日は寮に泊まってもらうから。(目配せするが間に合わない)

ナカヤマ　揃えるからちょっと待って。

フジタ　いいよ、先行ってて。

カイ　場所わかる。(わかっていると知っていて言う)

ナカヤマ　サークル棟の向こう。貯水池の隣。

カイ　空いてる部屋いっぱいあるから。……俺、１０５号室。札出てる。

フジタ　ああ。

ナカヤマ、タケダのいる机の所に来て、引き出しを探り、印刷物を取りだして選び始めている。
ナカヤマを避けて机を離れる、タケダ。
ハセガワ、フミ、タナカに続いて、カイも去る。
フジタだけが四畳半に残る。

タケダ　これは何年の話。

フジタ　一九八七年です。

タケダ　なつかしいね。八七年って、今とそんなに変わらないような気がするけど、けっこう昔の感覚だな。

フジタ　あの場所が特別だったんでしょう。

タケダ　ナカヤマ教官は、俺と同年代。

フジタ　……ええ。

タケダ　八七年、俺は何をしていたかな……。

ナカヤマ、資料の束を選りながら、来る。

ナカヤマ　委員長……、カイ君は、昔からあんなふう。
フジタ　……はい。
ナカヤマ　仲良かったの。
フジタ　一年生のとき同じクラスで、映画好きだったんで、映画部に誘ったんです。
ナカヤマ　……あれ、陸上部で一緒って聞いたよ。
フジタ　そのうち陸上部にも入ってきました。
ナカヤマ　そうか。
フジタ　ええ。
ナカヤマ　あいつ、ウソつけないやつだな。
フジタ　そうですか。
ナカヤマ　君も同類。
フジタ　……どうでしょう。
ナカヤマ　さっきあんな話したせいかな。（レジュメをまとめて出し、選別する）
フジタ　え。
ナカヤマ　なんだかこの四畳半が、ほんとうに舞台のように見えてきてしまった。
フジタ　……。

不意に、ドアを激しくノックする音。
ドアを叩いているのは、アツコ。

ナカヤマ　はい。

ナカヤマ、ドアを開けに行く。

ナカヤマ　鍵は掛かってないよ。（ドアを開け）何度言えばわかる。
アツコ　ごめんなさい。
ナカヤマ　……君か。（フジタに）アツコ君だ。そうか、あいつらみんな、ちゃんと自己紹介もしていなかったな。ミヤギアツコ君。

アツコ、上がって駆け込むように四畳半に来ると、しゃがみ込む。

アツコ　すみません。
フジタ　いえ。
アツコ　（蹲る）
フジタ　……顔色、悪いですよ。
ナカヤマ　……またか。……またあいつ。
アツコ　（頷く）
ナカヤマ　……うん。

ナカヤマ、ガラス窓に駆け寄ると、最低限音がしないように気をつけながら、しかし迅速に開ける。

ナカヤマ　どこにいたの。
アツコ　電話ボックスの陰。

ナカヤマ　……もういないな。
フジタ　なんです。

外を覗こうとしたフジタ、ナカヤマに制され、身を隠す。

ナカヤマ　なんだかね、後をつけたり、待ち伏せしたりするやつがいるらしいんだ。
フジタ　痴漢。
ナカヤマ　ちゃんと顔見た。
アツコ　……。（かぶりを振る）
ナカヤマ　ちゃんと顔見て、睨みつけてやれば、尻尾巻いて逃げ出すさ。そいつは議論をふっかけてくるときの君の迫力を知らんのだ。
アツコ　怖いんです。
ナカヤマ　……ここで待ち伏せされたのも三度目か。
アツコ　もしも目が合って、身動きできなくなってしまったら、おしまいでしょう。
フジタ　……あなたを狙ってるわけですか。
アツコ　わかりませんけど。
ナカヤマ　何か飲む。
アツコ　いいえ。
ナカヤマ　送ろうか。
アツコ　はい。でも今すぐは……。
ナカヤマ　物騒だな。ここも鍵をかけるようにしなきゃならんか。……合い鍵ほしかったら、あげるよ。
アツコ　そんな簡単にひとんちの鍵なんて持てません。……他の人はどうか知りませ

んけど。
ナカヤマ　横断道路から女子寮は夜道真っ暗だろ。一人で帰るのが怖いときは、寄ればいい。
アツコ　いいんですか。
ナカヤマ　そういう場所なんだ、ここは。
アツコ　「四畳半」はともかく、世帯全体としては？
ナカヤマ　そうか。そう考えるか。
アツコ　……私はそうです。
フジタ　さっきの……、奥さん、何ヶ月ですか。
ナカヤマ　奥さんじゃないよ。
フジタ　え。
アツコ　いろいろ事情がおありなのよ。
ナカヤマ　こら。
フジタ　……ナカヤマさんのお子さんかと思いました。
ナカヤマ　どう答えればいい。
フジタ　……。
ナカヤマ　君は子供に所有格をつけるのか。人間は生まれ落ちた瞬間からみんな独立存在だ。……血の繋がりに関係性の根拠を求めると、家族帝国主義の側に一挙に牽引されるぞ。それに君はなぜ子供の母親について尋ねない。彼女の人格はどうなる。子供の母親としてまず定義づけられて、本人の内面はその後か。
フジタ　そんなつもりじゃ……。
ナカヤマ　いやいや君は彼女の内面について訊くわけじゃない。おおかた次の質問は、名前に、年齢差、いつから一緒にいるのか、籍が入ってるか内縁か……。

アツコ　あなたは子供産んだことあるの。奥さんは。ご両親は健在。
フジタ　え。
アツコ　他人にプライベートを尋ねる人は、自分も訊かれたら答えるべきでしょ。
ナカヤマ　なるほど。
フジタ　子供はいませんよ。未婚です。つきあってる人はいます。ふつうのＯＬです。幸い両親は健在です。定年後は郡部に引っ越して悠々自適です。大学を出てから四年、まだ一度も帰っていません。意地を張ってるわけじゃありません。ただの不義理です。
アツコ　「ふつうのＯＬ」って言い方、気になる。
フジタ　……。
アツコ　しあわせそうじゃない。
フジタ　じゃああなたも答えてください。あなたのプライベート。
アツコ　訊きたいの。
フジタ　……ええ。
アツコ　私は「愛人」。
フジタ　……はい？
アツコ　知らないの、愛人。お金持ちの男の人にお金もらって、自分を切り売りする。効率悪いアルバイトやめて、時間を有効に使う手段。
フジタ　……。
アツコ　あら、困った顔して。
ナカヤマ　真に受けてないんだよ。
アツコ　今度紹介しようか、私の「パパ」。
フジタ　冗談にしてもたちが悪い。あなたはその……、フェミニズム方面の人かと思ってました。

ナカヤマ　冗談じゃなかったらどうする。
アツコ　自分のセクシャリティーをどう扱うかは本人に決定権があるはずよ。
フジタ　……それがほんとだとして、みんな知ってるんですか。それを。
アツコ　隠さなきゃならないこと？
ナカヤマ　ハハ。
フジタ　どこにでもいるんですね、こういう、他人を引っかけるような論法を楽しむ人たち。
ナカヤマ　しらふだからいけないんだ。飲もうよ。焼酎ならあった(はずだ)。
アツコ　……私、やります。勝手知ったる他人の家。
ナカヤマ　すまん。……冷蔵庫に入ってるの、適当にやっちゃって。
アツコ　(フジタに)私が女だからやるわけじゃないのよ。趣味の領域。

アツコ、台所へ行く。

ナカヤマ　で……、どんな芝居なんだ。
フジタ　え。
ナカヤマ　四畳半は見てもらった。今度は君の芝居を肴(さかな)にしよう。
フジタ　まだできてませんけど(話してもいいですよ)。
ナカヤマ　ああ。
フジタ　……その四畳半を取り巻く建物の構造は、この大学職員宿舎Ｒｄ棟４０３号室と似ています。
ナカヤマ　ほう。
フジタ　いっけん普通のアパート。隣りにも一部屋。それから、ちっぽけな洋間、実

質二畳ですね。申し訳程度のベランダ……。同じような間取りです。

ナカヤマ　３ＤＫというには狭くるしい。……奥が台所。その向こうが玄関か。

フジタ　そんな厳密に決める必要はないんです、芝居だから。

ナカヤマ　団地か。

フジタ　都営住宅です。

ナカヤマ　四畳半は。

フジタ　ここです。

ナカヤマ　……ふだんこの中には何も置かず、空っぽにしてある。

フジタ　ええ。

ナカヤマ　同じだね。

※　都営住宅・二号棟３０４号室　※

携帯電話の呼び出し音。

いったん退いていたタケダ、四畳半へ現れる。

彼方から、光化学スモッグ警報の、鈍い、くぐもった響き。

これまでと違う時間帯の、照明。

風呂場で現像の作業をしている、ヒロコ。

ナカヤマ　(タケダのこと)あいつは。

フジタ　この四畳半の番人です。

ナカヤマ　牢獄の。

フジタ　牢獄に見えますか。

タケダ　(携帯電話を取りだし)はい。ここです。……公園みたいな空き地、ジャングルジムと鉄棒がある、そこを左に見て……、そう、その緩やかな坂道を、少し降りてきてください。ええ、二号棟。３０４号室。もう下にいる？

ナカヤマ　(重ねて)あれは。

フジタ　携帯電話です。

ナカヤマ　ほう。

フジタ　この時代はもうみんな持ってます。

タケダ　……(続けて電話に)いえいえ、フルヤさんたちも遅れてますから。ここ、駅から遠いでしょう。駅前で待ち合わせてお客さん連れてくるときは、たいてい遅くなる。

ナカヤマ　これは未来の話か。

フジタ　ええ。

ナカヤマ　いつ。
フジタ　２００２年です。

チャイムが鳴る。

タケダ　（電話に）鍵は掛かってないよ。（電話が切れていることに気づき）はいはい。

タケダ、ドアを開けに行く。
入ってくるのは、いったん退いていた、アッコ。

タケダ　（ドアを開け）いらっしゃい。
アツコ　ごめんなさい。初めての日に遅れるなんて。
タケダ　だからそれはいいって……。
アツコ　昔この辺り住んでたから土地勘あると思ってたんですけど、すぐ近くに別な団地並んでて、迷っちゃいました。
タケダ　皆さんそうおっしゃいます。

ゴム手袋にエプロン姿のヒロコ、出てくる。

ヒロコ　いらっしゃい。
アツコ　よろしくお願いします。
ヒロコ　（タケダに）そこの四畳半は空き部屋にしてるから、誰もいないときは何やろうとけっこうだけど、今日はインタビューに使いますから。

タケダ　はあい。
ヒロコ　お風呂場入ってこないでね。写真の現像してるから。……（アツコに）フルヤさん、ああ見えておおざっぱな人だからあんまり気にしないみたいだけど、今日聞いた話は通信に載せること以外はみんな秘密。オフレコ。わかる。絶対よそで喋っちゃ駄目。
アツコ　……はい。

ヒロコ、風呂場に戻る。

ナカヤマ　これは君の考えた世界だから、登場人物を違った人間に置き換えることはできないだろうが、私は小説を読んでいても、出てくる人間に自分の知り合いの顔を当てはめて筋を追う癖がある。見当違いな人間のことを思い浮かべているかもしれないが、大目に見てくれるか。
フジタ　もちろん。

ナカヤマ、腰を落ち着けて、見守る。

タケダ　まあ、もうすぐ来られると思いますよ、フルヤさん。
アツコ　……何か手伝いましょうか。
タケダ　私のことは気にしないで。くつろいじゃってちょうだい。
アツコ　……私ずっと社宅族だったから、こういう団地モード、落ち着きます。
タケダ　そう。
アツコ　ええ。
タケダ　私は落ち着かないね。崩れてきちゃったらどうするの。駄目だね。こんな骨

粗鬆症みたいな建物。

アツコ　……はい？

タケダ　６０年代後半に建てられた建造物は脆いよ。建築ブームというか、万博頃ぱかぱか建てられた鉄筋コンクリートはたいてい突貫工事で海砂使ってる。塩が染み出て中の鉄骨が錆びる。鉄は錆びると堆積が二倍から二・五倍に膨張する。そしたらどうなる。

アツコ　……。

タケダ　亀裂が生じるか歪むわけ。ヒビは上から塗ったくったら見えなくなるけど、ほら。

　　タケダが空き缶を畳の上に置くところころ転がる。

タケダ　ここなんか築３５年はいってる。後十年もしたら水漏れ直すより建て直した方が安上がりってことになる。

アツコ　それで引っ越すことにしたんですか。

タケダ　引っ越す。私が。

アツコ　都営住宅から引っ越す人がいて、ご家族はもうよそに住まわれてるんだけど、ご本人はしばらく仕事場として残しておきたくて、それで完全に引っ越すまでのあいだ一年ほど、空いてる部屋を「連絡事務所」として使わせてもらってるって。

タケダ　そう。私は「連絡事務所」の用務員。月給十万の雇われマダム。月曜から金曜の十時から六時。来る途中、開館直後のざわざわしてない図書館覗いて、風呂道具持って銭湯寄って帰る。私のライフスタイル。

アツコ　はい。

タケダ　……都営住宅仕事場にしちゃったのは、あの人。

　　タケダがフジタを見る。
　　アツコも見るので、立ち上がらざるを得ないフジタ。

フジタ　……フジタです。

アツコ　初めまして。イノウエです。

フジタ　あんまり気にしないでください、勝手にやってますから。

アツコ　お世話になります。

タケダ　気にしない気にしない。この人、ほんとに勝手にやってるから。たまに何か口走ったり、うんうん唸ったりするけど、無視してね、無視。

フジタ　そうしてください。

タケダ　この人はお芝居の台本を書いている。牢獄のお芝居なんだって。牢獄のことばかり考えてるうちに、自分が袋小路に入っちゃって、うんうん……。

フジタ　ほんとうのことばかり言わないでください。

タケダ　私はぜんぜん気にしません。私、この人に雇われてるわけじゃないの。この人がフルヤさんに場所を提供した。フルヤさんが私を雇った。そういう間柄。

　　携帯電話の呼び出し音が鳴っている。
　　タケダ、電話に出る。

タケダ　はーい、とんじいです。ぶー。ちょっと待ってね。

アツコ　とんじいって。

タケダ　（アツコに）私のこと。もちろん本名ではない。ぶー。

タケダ、自分の机の所に戻る。

タケダ　（電話に出て）あーら、なかなか出ないったって、とんじいの電話はあんたのためだけにあるわけじゃないんだから。話し中は話し中。留守電はなーし。私、電話の留守番嫌いなの。（自分が）古い人間だね。……ぶー。わかった。聞こう。あんたの話全部聞こう。途中で何も言わないから。正直に洗いざらい喋らなかったらまたとんじい喋っちゃうよ。……ぶー（「どうぞ」の意味）。

フジタ　（重ねて）とんじいっていうのは、タケダさんの電話のキャラクター。あの、子供たちの相談乗るときに。

アツコ　いのちの電話みたいな。

タケダ　（ちゃんと聞こえてた）命の責任は取れないね。

アツコ　……フジタさん。お子さん、東小ですよね。

フジタ　はい。

アツコ　同じクラスだったんです。

フジタ　……ああ。

アツコ　どちらもＰＴＡの劣等生。でも何度かお見かけしましたよ。

フジタ　そうですか。

アツコ　十年くらい、会社勤めだったんですけど、子供四年生で、学童保育に通えなくなったでしょう。手が掛からなくなったのはいいんだけど、毎日夕方ほったらかしとくわけにはいかないから……。

フジタ　ええ。

アツコ　思い切って会社やめて、昔の仕事、戻ろうかなって。自分の時間で働けるように。失業保険出てる間にカン戻そうと思って、ちょっとお手伝いで、こちらに。

ドアが開く。

入ってくる、セツコ（フルヤ）、アンドウ、ハルヤマ。

セツコ　じゃ、狭いですけど、こちらに。

ハルヤマ　はい。

ヒロコ、小さな卓袱台と座布団を四畳半に運んでくる。

セツコ、簡易印刷の小冊子を取り出す。

セツコ　すみません、わざわざお越し頂いて。駅前でどこか入ってもよかったんですけど。

ヒロコ　喫茶店じゃ人目あるから。

セツコ　そうそう。

ヒロコ　隣の学区ったって、地元だし。

ハルヤマ　私も一度、フルヤさんにお目に掛かりたくて。

セツコ　（紹介して）ヒロコさん。本職はカメラマン。写真はだいたいこの人が……。

ヒロコ　（写真は）趣味ですよ、趣味。

セツコ　……今度から編集を手伝ってくださる、イノウエさん。

アツコ　初めまして。

セツコ　出版社でお仕事されてたんですって。

ヒロコ　そうなの。

アツコ　そんな、昔です。小さいとこ転々としてただけですから。

セツコ　(ハルヤマに)前にもお話ししましたけど、これに載せさせていただきたいんです。

ハルヤマ　はい。(小冊子を見ている)

セツコ　先生方のお話はだいたいインタビューをまとめてるんです。皆さん、現場がお忙しくて、原稿を書いていただくより、お話しいただいた方が……。

ハルヤマ　(奥付を読む)「地域の教育を守る市民連絡会」。正式にはそういうんですね。

セツコ　ここの人たちはみんな仲間です。通信(この小冊子のこと)の編集もここで。

ハルヤマ　何部くらい出てるんです。

ヒロコ　多くて二千部ですけど、ホームページにも。

ハルヤマ　そうかー。

ヒロコ　だいたい匿名で載せてますから。

ハルヤマ　匿名ったって、身近な人が読んだら、私だってわかるんじゃないかな。

セツコ　……けっこうたいへんなことになってるんですか。

ハルヤマ　私が腹をくくっちゃえばいいだけのことなんですけど。

セツコ　……。

ハルヤマ　うーん。

タケダ　……(電話に)ぶー。それで終わり。よかった。それ、君は悪くない。ぜんぜん悪くない。とんじいが保証するよ。……なに。自分も当然だと思ってた。だったらそんな泣きそうな声で電話してくることないんじゃない。はい。じゃ、今日の君の動物は、キツネ。コンコンコンコン、キツネはコン。相手の顔色ばっか見てちゃ駄目。わかった。ぶー。(電話を切る)

セツコ　どうも最近、教員に対する評価を云々することが増えているような気がする

んです。

ハルヤマ　ええ。

セツコ　結局これって、「新しい歴史教科書」や日の丸・君が代問題なんかで、教師の権限を奪おうとしてきた趨勢と繋がってるような気がするんですよ。例のアンケートもそうでしょう。

ヒロコ　(アンドウに)アンドウ先生、お持ちでしたら、先に頂いちゃいましょうか。

セツコ　どこで手に入れたの。

アンドウ　父兄から。(印刷物を渡す)

タケダ　それって、前、言ってたやつ。

ヒロコ　(見て)わあ、ほんとにこうなってるんだ。

ハルヤマ　なんです?

セツコ　5月頃から、いろんなところに「学校教育評価アンケート」っていうのが送られてきてるって聞いたんで、持ってきてもらったの。

ハルヤマ　……どんなの。

ヒロコ　言ってみれば、先生の通信簿。

タケダ　(読む)「担任の先生は、授業中よくわかるように教えてくれますか」「どの教科がわかりやすいですか・わかりにくいですか」「先生はあなたを認めてくれたり、話を聞いてくれたりしますか」「あなたは先生を十分信頼していますか」「学年合同の行事や授業の時、先生たちは協力して活動していると思いますか」

ヒロコ　「わからない」という項目のない五段階評価。

セツコ　マーケティングリサーチのノリね。

ハルヤマ　どこに送られてきてるの。保護者宛。

アンドウ　(頷き)「よくお子様と話し合って記入してください」って。

タケダ　生徒に先生を採点させるのか。
セツコ　……子供をスパイにしようとしているわけ。
タケダ　面白いじゃない。
アンドウ　あと、学校評議員なんかに。
アツコ　学校評議員ってなんですか。
アンドウ　地域から一般の人が選ばれて、学期ごと二回学校来て、給食食べたり運動会や授業参観するの。
アツコ　先生のことなんかわかるわけないですね。
ヒロコ　これ、このまま載せちゃおうかな。
セツコ　いいんじゃない。
ハルヤマ　私、馬鹿みたいですね。子供たちの成績に順番つけるの嫌だって言ってたら、知らない間に教師の自分はきっちり五段階評価されてる。
アンドウ　……私なんかコテンパンでしょうね。
ハルヤマ　やっぱりお話ししない方がいいのかな。懲戒処分受ける可能性もありますから。
ヒロコ　どうして。
ハルヤマ　服務上の義務を怠った。地方公務員法第二十九条違反。
ヒロコ　生徒の成績を相対評価から絶対評価に変えようっていうのは文部科学省の方針でしょ。ハルヤマ先生は自分で判断して全員に「すぐれている」をつけた。それだけのことでしょ。
ハルヤマ　全員同じなのが気に入らないんでしょう。
セツコ　私、絶対評価、賛成なの。これまでの相対評価は「たいへんすぐれている」７％、「すぐれている」２４％、「ふつう」３８％、「おくれている」２４％、「たいへ

んおくれている」７％、成績順に機械的に振り分けてきたわけでしょ。そういう枠にとらわれないで、ようやく評価らしい評価ができるようになると思うの。
ハルヤマ　まあ私の場合、新学期早々、「全員に『すぐれている』をつけます」って言っちゃったから。
タケダ　で、実際一学期の成績は、全員「すぐれている」。
ハルヤマ　はい。
タケダ　じっさいすぐれていた。
ハルヤマ　生徒の些細な違いにこだわるのが嫌なんです。八十点取れなかった子には何回も提出させて、八十点になるまで何度も出させて、だから子供たちは最終的に全員八十点取れたことは間違いないんです。どれだけ時間掛かろうと、全員が目標に到達できたら、差をつける必要なんかないはず。
セツコ　クラス全員が八十点ならいい先生よ。
ヒロコ　私のまわりではみんな、よくやったって。
ハルヤマ　それにやっぱりこっちも人間だから、相性とか、好き嫌い、反映するじゃないですか。生徒の態度が気にいるかいらないかなんて、主観でしょ。そういうこと意識しながら成績つけるなんて、自分で嫌になっちゃう。
セツコ　そうね。
ハルヤマ　こんな問題になるなんて思わなかった。
セツコ　あなたがおかしいわけじゃない。全員に八十点をつけるのも、教師の権利。そうよ。みんなそうすべきだわ。全ての教師が八十点つければ、日本の教育は変わる。
ハルヤマ　……内申もみんな同じ点だと、入試の時困りますよ。
ヒロコ　まあ、全員八十点つける学校、一校でもあったら、日本の教育変わるわね。
アンドウ　無理よ、そんなの。

ヒロコ　そう。
アンドウ　ハルヤマ先生は、明るくて、はっきり物言えるし、だから生徒に人気あるし、学区内でも評判のいい先生。だからこういう思い切ったことできるし、その後もこの程度の騒ぎですんでる。
ヒロコ　なによ。
アンドウ　旦那さんも商社マンだし、ご実家だから家のローンもない。子供の面倒も見てもらえる。
ハルヤマ　まあ、そうだけど。
ヒロコ　アンドウ先生。
アンドウ　私なんかが同じことしたら、ここぞとばかりに追い出しかけられちゃう。
セツコ　まあ、アンドウ先生がこちらのお手伝いしてくださってるんで、いろいろ誤解を受けやすいのは確かなのよね。
アンドウ　それが誤解じゃないんだなあ……。
ハルヤマ　どうしたの。
アンドウ　絶対教師に向いてないのに教師になっちゃった人って、いるんですよね。私その典型。
セツコ　外向的な性格じゃない先生方、いっぱいおられるわよ。
アンドウ　たぶんね、私、生徒が嫌いなんです。……大ッ嫌い。嫌い！
ハルヤマ　あら。
ヒロコ　アンドウ先生。
タケダ　何かあったのね。
アンドウ　フフ……。（硬直している）
タケダ　何があったのかな。

アンドウ　……。

　タケダ、不意に、四畳半に座ったアンドウを、突く。転がるアンドウ。

ヒロコ　……ちょっと、何すんの。
タケダ　だいじょうぶ。誰もあんたに触らない。だーれもちっとも触らない。だーれもちっとも触らないのに、あんたの身体は揺れている。ゆらゆらゆらゆら揺れている。ほーら、ほら……。

　仰向けになったアンドウ、じっさいにゆらゆら揺れる。

タケダ　何かあったのかな。……何があったんだろう。
アンドウ　……。
タケダ　喋らなくていい。なんにも喋らなくていいよ。
アンドウ　……。
タケダ　考えない考えない。……痒い。痒いなあ。痒いところあるね。背中の痒いとこ、ゴーシゴシして……。ゴーシゴシ……。あー、気持ちいい。気持ちいいなあ。
アンドウ　……。（笑っている）
タケダ　（笑っている）
アンドウ　……私、なんであんなことしたんだろう。
タケダ　何したの。
アンドウ　……道徳の授業で。
タケダ　……道徳の。

アンドウ　コピー配ったんです。

タケダ　コピー。

アンドウ　「完全自殺マニュアル」

タケダ　……はい。

アンドウ　子供にもできそうなのばっかり選んで。やり方のところ、アンダーラインして。

セツコ　どうしてそんなこと……。

アンドウ　命のたいせつさを教えるため。……そう言って渡した。みんなどよめいた。怖がった。そうね。ウケを狙ったの。

ヒロコ　なんか暗いウケね。

アンドウ　私、大きな声出ないし、いつもワンテンポ遅いから、生徒に嘗められてる。私だって負けてないわ。心の中ではいつも、ちゃんと声を出して私に挨拶する子としない子、チェックしてるし。一度「私の授業をききたくない人は出ていって」って言ったの。そしたらみんな、ほんとに出て行っちゃった……。

セツコ　仕返しなの。

アンドウ　みんな怖がってた。クク……。

ハルヤマ　あれって、都の不健全指定図書になってるでしょ。本屋どこにも置いてないし。

アンドウ　最初出たとき真っ先に買ったもの。

ハルヤマ　マジ？

セツコ　そのやり方で子供自殺したらパーフェクトね。

ヒロコ　何がよ。

アンドウ　実現の可能性、あります。

ハルヤマ　そうなの。

アンドウ　誰か、私がアンダーラインしたページを送りつけてきたんです。

ヒロコ　えーっ。

アンドウ　夜中に、ファックスから、ジーコジーコ……。

アツコ　どのページだった。

アンドウ　何度も繰り返し、ジーコ……。

アツコ　どのやり方。

アンドウ　投身自殺です。

ヒロコ　飛び降り……。

セツコ　それはあれかな、自殺するぞって脅迫してるのかな。

ハルヤマ　嫌がらせよ、そんなの。

アンドウ　私、もうここには来ません。皆さんにご迷惑おかけしますから……。

セツコ　そんなこと。

アンドウ　お手伝いしている私がこんなことじゃ……。

タケダ　あなたは先生でしょ。

アンドウ　……。

タケダ　好きで先生になろうと思ったんでしょ。

アンドウ　……。

タケダ　自分がなりたかったものになれた人って、あんまりいないんじゃないかな。

アンドウ　クク……。

タケダ　クク……。

アンドウ　……とんじい。

タケダ　はーい。

アンドウ　今日の私の動物は。

タケダ　君はゾウさん。ちょっと耳が大きすぎるだけで、なんにも悪いことしていない。自分が大きすぎるんじゃないかなーって、心配しすぎ。

アンドウ　……。

ハルヤマ　フルヤさん。

セツコ　はいはい。

ハルヤマ　ほんとは私、今日、お断りするつもりで来たんです。

セツコ　あら……。

ハルヤマ　都や教育委員会の方針に反対している団体の出すミニコミに出るわけにはいかないって……。でも構いません。

セツコ　いいの。

ハルヤマ　……実名で載せてください。

セツコ　……。（頷く）

　ナカヤマ、畳の表面に触っている。
　畳の上にタケダを残して、セツコ、ヒロコ、ハルヤマ、アンドウ、去る。
　アツコも去りかけるが、帰りしな、畳の外にいるフジタに、

アツコ　自殺についての劇は、書いたことがある。

フジタ　登場人物が自殺したことはあります。

アツコ　飛び降り自殺は。

フジタ　……。

アツコ　飛び降り自殺はどう。

フジタ　……さあ。思い出せません。

アツコ　……嘘つき。

　アツコ、去る。
　ナカヤマ、タケダ、それぞれ畳を撫でていたが、

ナカヤマ　……背中が痒いってことは、あれかな。

タケダ　あれかな。

ナカヤマ　あれだよ。

タケダ　やっぱり。

　ナカヤマ、タケダ、脱兎のごとく起きあがり、掃除道具を手に、畳を掃除しはじめる。

ナカヤマ　……今思うと、あれは一つの真理であった。

タケダ　はい？

ナカヤマ　「自分の部屋をきちんと管理することもできない人間が、世界の問題を捕まえられるはずがない」

タケダ　……誰のコトバ。

ナカヤマ　別れたかみさん。

タケダ　俺が聞いたのはこうだ。「自分の身体をきちんと管理することもできない人間に、環境問題を論ずることができるだろうか」

ナカヤマ　……誰のコトバ。
タケダ　ビタミン剤のＣＭ。
ナカヤマ　掃除しなきゃいかんな。部屋も、身体も。
タケダ　「身体にいいこと、何かやってる？」
ナカヤマ　徹夜麻雀に、ちゃんぽんハシゴ酒。
タケダ　続いてるのは歯磨きだけ。
ナカヤマ　俺、電動使い出してから、磨く時間伸びたね。メカが好きなの。スイッチ入れてジーっていうのが快感で。元祖メカおたく。
タケダ　……きゅっ、きゅっ。きゅっ、きゅっ。
ナカヤマ　……。
タケダ　覚えてない。歯磨きのコマーシャル。女の子が磨いた後、自分の歯を自慢するの。自分で真っ白ーい歯、触って、きゅっ、きゅっ。きゅっ、きゅっ。
ナカヤマ　……きゅっ、きゅっ。きゅっ、きゅっ。
タケダ　あの宣伝見てから、歯磨き好きになった。
ナカヤマ　俺も虜になった。……きゅっ、きゅっ。きゅっ、きゅっ。
タケダ　どこ行っちゃったのかね、あの子。
ナカヤマ　死んじゃったよ。
タケダ　……どうして。
ナカヤマ　わかってて訊くなよ。
タケダ　……。

二人、動きを止める。
しばらく後、

ナカヤマ　……腰に悪いな、この姿勢。
タケダ　まったく。

※　西山寮・会議室　※

ナカヤマ、ばたんと畳に倒れる。
タケダ、畳から逃れる。
なぜならば、彼らがいた四畳半の周囲に、畳が増えてくるのだ。
一挙に二十畳敷きの広間が出来上がる。
ナカヤマのいる畳を残して、もともとの四畳半の敷き方も組み直された。
畳の上に腹這いになってクロールの動きをしている、ナカヤマ。

フジタ　ほんとに知らなかったんですか、岡田有希子。
タケダ　名前を知ったのは、死んだ後だ。
フジタ　おニャン子クラブなんかよりよっぽど人気がありました。あの年の四月。彼女が死んだ四谷のビルだけじゃなくて、日本全国で、真似をして飛降りる若者たちが跡を絶ちませんでした。
タケダ　つまらないね。今でも歯を磨くたび、五回に一回は思い出す。……きゅっ、きゅっ。きゅっ、きゅっ。

この空間に太鼓を持ち込んだ者がいる。
太鼓を叩き、語る、サワダ。
質問する、クボ。
寝転がったままの、ナカヤマ。
三々五々入ってくる、カイ、ハセガワ、フミ、タナカ、ワタナベ、

アツコ、セノオ。

クボ　……あなたはほんとうに、この大学の教員だったのですか。
サワダ　そうだ。
クボ　科目は。
サワダ　英語。
クボ　出欠は。
サワダ　とらない。
クボ　教科書は。
サワダ　勝手に選べ。
クボ　授業は。
サワダ　好きな本を持ち込んで読め。わからなければ聞けばいい。
クボ　大学紛争がはじまると、授業を放棄しましたか。
サワダ　機動隊が学内に導入された。授業なんかやっていられるか。
クボ　全ての学生に八十点をつけたというのはほんとうですか。
サワダ　研究室に顔を出せば「優」をつける。
クボ　試験はないのですか。
サワダ　……教官が学生を評価するということは可能か。
クボ　「オール八十点・優」の成績表用紙を「緒方保子」名義で郵送したというのは。
サワダ　ほんとうだ。
クボ　その女性は誰です。
サワダ　……。
クボ　あなたにとって大事な人ですか。

サワダ　……。

クボ　教官会議はその成績表を保留して他の英語教官による再テストを行いましたね。

サワダ　なぜ教養部はＮ教官に代わって単位取得の判定を行いうるのか。一枚のペーパーテストで見も知らぬ生徒に成績の判定を下すのか。

クボ　１９７２年五月、大学当局は国家公務員法に抵触するとして、あなたの懲戒処分を発表しました。

サワダ　……。

クボ　あなたは支援する学生と教養部のバリケードに立て籠もった。

サワダ　……。

クボ　大学当局は「挑発」を繰り返すあなたを泳がせて、学内管理体制強化の口実を作ったという意見もありますが。

サワダ　ナンセンス。

クボ　職を失ったあなたは、学友会の嘱託事務員として雇用され、大学当局と敵対しながら、その後の学園闘争の拠点となった。

サワダ　私は教官だ。

クボ　授業をしていないのに。

サワダ　解雇が不当なものである以上、私は教官以外の存在たりえない。

クボ　あなたの授業を受けることは可能ですか。

サワダ　君が望むなら。

クボ　いつ、どこで。

サワダ　人類が知覚した全ての空間を教室とし、言語によって記述しうる時間の総体を授業時間とする。

クボ　あなたが学生に送った最後のコトバを覚えていますか。

サワダ　「最後の一人までが全体である」

クボ　どういう意味ですか。

サワダ　……。

クボ　このコトバを送った意図は。

サワダ　「最後の一人までが全体である」

サワダ、激しく太鼓を打つ。

サワダ　これがＮ教官。

クボ　「キツネ目の男」じゃない。

サワダ　Ｎ教官。彼が東京からこの大学に赴任したのは学内闘争の高まる六八年。キャンパスに機動隊が乱入。それを阻止した学生の逮捕。……数千名が起ち上がった。学生、教職員、労働者、市民。バラバラじゃなかった。あれこそ大学。共同性。自主的空間。自治の創世。それがなぜ崩れたか。……寮生への弾圧。党派の介入。大学当局の警察権力への屈服。キャンパスは沈黙した。我々は、バラバラの敗北を十五年生きている。

クボ　生きている。

サワダ　大学とはなんだ？　講義はつまらない。授業はおざなり。世間話か知識のばらまき。君たちは単位制の奴隷だ。従順かつ有能な賃金奴隷として大量生産され、独占資本の利益に奉仕させられる。

クボ　させられる。

サワダ　大学祭やめよう。大学もやめよう。大学祭？　それってほんとに大学祭？　個々バラバラの情況の中で、個々バラバラに旅に出て、個々バラバラに雀荘に行くように、個々

バラバラの大学祭だとしたら、大学祭なんかどうだっていい。ない方がまし。

クボ　ない方がまし。

サワダ、太鼓を打つのをやめる。

サワダ　……練習したのはここまでです。

セノオ　……うーん。

タナカ　君たちほんとに軽音楽部。

ハセガワ　ジャンルとしては何なの。

サワダ　太鼓の弾き語り。

ワタナベ　(寒気がするのか、どてらを被りつつ)大学祭の出し物で大学祭批判。

フミ　いいんじゃない。

カイ　ナカヤマ教官の歴史を知らない人間、増えてるから。

ナカヤマ　……俺、出なきゃ駄目。

サワダ　本人が一緒だから面白いんです。

ナカヤマ　そういうもんか。

アツコ　異化効果。

クボ　適当に、寝転がっててくだされば。

サワダ　観客もみんな布団に入って見るというのがいいと思うんです。

タナカ　布団なら、十組以上あるよ

ハセガワ　ここに一番泊まってる党派の連中、ちゃんと干さないから、におうけど。

フジタ　ほんとに寝ちゃったらどうですか。

ナカヤマ　うるさくて眠れない。

カイ　……本番もここでやりたいって。

ワタナベ　えーっ。

サワダ　やりたいんです。

クボ　京大の吉田寮なんか、食堂でイベントしてるんでしょう。

サワダ　(ここは)ふだん遊んでる部屋じゃないですか。

アツコ　まあ会議室っていっても、総会やる以外、ほとんど飲み部屋でしょ。

カイ　大学祭期間中は劇団が泊まってるだろう。

フジタ　(自分たちは)寝るだけだから。

サワダ　十時過ぎには明け渡します。

ハセガワ　……まだ大学祭じたいが開催決定したわけじゃない。

クボ　やりましょう。

カイ　……君たちは実行委員に立候補しておきながら、一度も顔を出してないね。

ハセガワ　作業と相互討論の徹底を共有していない。

サワダ　討論に参加するのがメンバーになる資格なんですか。

ハセガワ　参加団体と認めるには。

サワダ　やる気あるんだから、それでいいじゃないですか。

クボ　……去年、大学祭潰したのは、あなた方でしょう。

セノオ　なんだ。

サワダ　みんな言ってますよ。大学祭ないんだったら、入学時に強制的に払わされた学友会費返してほしいって。

ハセガワ　民主的に会議で決定したことだ。

サワダ　大学祭の実行委員長を学友会総務委員が兼任してるのも、おかしいんじゃないか。

カイ ……そうか。
サワダ ご存じだとは思いますが、学生部が各サークルを呼び出しています。
セノオ その話か。
サワダ このまま学友会に所属していると、来年からの活動を保証できないと脅してます。
セノオ 実体のない脅迫だ。
カイ 学友会は全サークルの管理事務をする全学組織だ。会長は学長なんだぞ。解散を決められるのは全学生参加の臨時総会だけだ。
ワタナベ 解決してないことは沢山あるけど、何もしないで外から文句言うよりましだと思わないか。
サワダ ……。
セノオ おまえ寝てろよ。風邪だろ。
ワタナベ ……だいじょうぶ。
アツコ とにかく前回の実行委員会には、参加団体がみんな出席したんだから、開催の正式決定をいたずらに引き延ばすことないと思うの。
ハセガワ だけど俺、あいつらがちゃんとゴミ捨てたりテント番したりするとは思えないんだ。
セノオ そこなんだよ。
アツコ やる前からあきらめちゃ無理よ……。

一同、困惑の間。

カイ （フジタに）おまえここで何してるの。
フジタ うん。
カイ 台本まだできないの。
フジタ 少し変えるだけですむと思うんだけど。
カイ ……このまま学園祭までいるつもり。
フジタ いったん東京、戻るよ。稽古もしないといけないから。
クボ 出演できるんですか、僕たち。
サワダ ……（クボに）ちゃんと人の話聞こうよ。

トシコ、タチバナ、サリフ（サリプディン・アブドゥラ）、来る。

タチバナ 寮費わずか百円。アルバイト代がほとんど残りますから国立大の寮生は金持ちです。たいていのやつがクルマやステレオ持ってる。
トシコ （サリフのためにタチバナの日本語をインドネシア語に訳す）
タチバナ こちらの西山寮にはとかくの噂がありましたが、今は平和です。
トシコ ……はい。（訳さない）
タチバナ 派閥の代理戦争に巻き込まれて、ひどかった時期もある。
トシコ 亡くなった方もおられたんでしょう。
タチバナ コスヤタカオ君は、私の学生だった。
トシコ ……。
タチバナ 昔みたいな苦学生はいやしません。楽にやって下さい。今や日本本来の教育機関は、学校より会社です。

トシコ、タチバナ、サリフ、中に入る。

会議室にいた人々、気づいて立ち上がったり、正座したりする。

タチバナ　サリプディン・アブドゥラ君だ。

サリフ　……初めまして。サリフと呼んでください。

会議室の人々、口々に挨拶する。
「サリフ」と言ってみたりする。

カイ　じゃあ。

アツコ　……さん、はい。

一同、「モスラの歌」を歌う。
サリフ、一瞬驚くが、やがて歌に応えて舞う。
最後のワンフレーズは、サリフがリフレインで独唱する。
終わって、盛大に拍手。

ナカヤマ　いつ練習したの。

カイ　……モスラの歌って、インドネシア語だって聞いたんで。

サリフ　歓迎ありがとうございます。

一同　(口々に応える)

サリフ　日本語でまだ気持ちでません。インドネシア語で喋ります。

一同　(口々に応える)

サリフ　(インドネシア語)タチバナ教授、寮の皆さんのおかげで日本の寮に入れて、

とても嬉しいです。

トシコ　タチバナ教授や皆さんのおかげで日本の寮に入れて、とても嬉しいです。

一同　(口々に応える)

サリフ　(インドネシア語)せっかく日本に来たのに、日本の学生と話す機会がなかった。これからが楽しみです。

トシコ　せっかく日本に来たのに、日本の学生と話す機会がなかった。これからが楽しみです。

一同　(口々に応える)

サリフ　(インドネシア語)モスラの唄は、最初日本語で歌詞が書かれてたんですけど、東京医科大に留学してたインドネシアの留学生が訳して、それが採用されているそうです。

トシコ　モスラの唄は、最初日本語で歌詞が書かれてたんですけど、東京医科大に留学してたインドネシアの留学生が訳して、それが採用されているそうです。

一同　(口々に応える)

サリフ　(インドネシア語)だけど意味わからないところあるんだ。「インファント語」というのに変えられてるから。

トシコ　ただしインドネシア語がもとにはなってるんですけど、架空の「インファント島」の石碑にかかれていた呪文を歌にしたという設定なので、インドネシアの人が聞いても意味はわからないそうです。

サリフ　(インドネシア語)だいたいはわかる。祈りに答えて、永遠の生命と平和を守れ。

トシコ　……まあ、私たちの祈りに答えて、永遠の生命と平和を守れっていう歌みたいですけど。

タチバナ　自己紹介は総会の時。ヤマモト君(トシコ)が写真つきの名簿、用意してく

れるそうだから。

一同　（口々に応える）

アツコ　何か日本の食べ物で、まだ食べてないけど食べてみたいものって、ありますか。

トシコ　（インドネシア語）何か日本の食べ物で、まだ食べてないけど食べてみたいものって、ありますか。

サリフ　……だいこんめし。

タチバナ　インドネシアの人はだいたい、『おしん』観てますから。

タナカ　豚は食べられない。

ハセガワ　そうか。

タチバナ　イスラムの人にとって、豚は特別なものだから。

カイ　寮食のおばさん、特別メニュー用意するって。

トシコ　（インドネシア語）寮食で豚のないメニューを用意してくれるそうです。

サリフ　ありがとう。ありがとう。

　　サリフ、少しお祈りを思わせるポーズ。

タチバナ　ムスリムはサラートっていって、一日五回の礼拝を行わなければならない。

一同　（口々に応える）

タチバナ　あと、ラマダン。年一度、一ヶ月の断食をする。

セノオ　一ヶ月断食したら、ふつう死んじゃうじゃない。

ワタナベ　インドネシアもフィリピンみたいな政変、あるんですか。

タナカ　やっぱり若王子事件みたいなこと、起こってるんですかね。

セノオ　そんなこと言うなよ。

カイ　……（フジタに）おまえの芝居、もとのホンではアジアの架空の国の革命兵士がでてくるだろう。

フジタ　ああ。

カイ　その役で出てもらったらどうだ。

ハセガワ　（トシコが）訳せないよ、そんなにいっぱい。

トシコ　……。（訳さない）

フミ　もっと大きい人かと思ってた。

ハセガワ　外国人なら大きいっていう思いこみ、ヘンだよ。

　　その間に、サリフ、畳に触れている。
　　人々に見られていることに気づいて、

サリフ　インドネシア、畳、あります。

一同　（口々に応える）

トシコ　畳のある部屋に住めるので、喜んでます。

サリフ　（インドネシア語）人が川で溺れて見えなくなってしまったとき、川に投げます。

トシコ　人が川で溺れて見えなくなってしまったとき、畳を川に投げます。

カイ　ゴザですか。

サリフ　（インドネシア語）　ゴザは川に流れていき、人々は土手からそれを追っていくのですが、たいていゴザはどこかに引っ掛かって止まります。

トシコ　ゴザは川に流れていき、人々は土手からそれを追っていくのですが、たいていゴザはどこかに引っ掛かって止まります。

サリフ　（インドネシア語）人々はそのゴザが知らせた場所の下に溺れた人の体が沈ん

でいると考えて、そこに飛び込んでその人を引き上げます。
トシコ 人々はそのゴザが知らせた場所に溺れた人が沈んでいると考えて、飛び込んでその人を引き上げます。
タチバナ 最近じゃ新素材の畳が出回ってますけど、この辺りは畳表に使うイ草の産地です。日本の学生服の五割、ジーンズの七割も県内で作ってる。
一同 （口々に応える）
トシコ （インドネシア語）この辺りは畳の原料イ草の産地です。織機の伝統があって服づくりも盛んです。
ハセガワ 国費留学ですか。
タチバナ ハビビ大臣肝煎りの、応用科学技術庁による留学生だ。
トシコ （インドネシア語）留学の枠のこと。

ワタナベ、急に立ち上がる。

ワタナベ ……（韓国語）僕は在日韓国人です。今までみんなに言わないでいたけれど、あなたが来た今日、みんなに言おうと思う。
タチバナ ワタナベ君……。
ワタナベ 僕はワタナベじゃない。李得勲（リ・トウックン）。在日韓国人です。今までみんなに言わないでいたけれど、あなたが来た今日、みんなに言おうと思う。
トシコ （インドネシア語）彼は在日韓国人の李得勲。あなたが来たので、今日初めて、自分が日本人でないことを話した。
サリフ （インドネシア語）在日韓国人のことは聞いたことがあります。
トシコ 在日韓国人のことは聞いたことがあります。

ワタナベ これからは僕をワタナベではなく、李と呼んでください。
一同 （口々に応える）
ワタナベ （韓国語）僕はインドネシアのことをほとんど何も知らなかった。インドネシアだけじゃない。アジアの友達のことをよく知らなかった。思想制限も情報規制もされているわけではないのに。知らないことを自然に感じていた。韓国でも北朝鮮でも、日本文化を紹介してはいけないことになっている。歌謡曲も映画も駄目だ。そうした規制は理不尽だと思う。しかし、規制もないのに知ろうとしないこと、それを疑わないことはもっと理不尽だ……。

語るうち、ワタナベ、熱が回ったのか、倒れる。
駆け寄って寝かせる、セノオ、ハセガワ、タナカ。

セノオ しっかりしろ。
ハセガワ 風邪引いてるのに無理するから。
カイ 今日ずっと気にしてたからな、サリフが来るって。
トシコ （インドネシア語）彼は風邪を引いていたのに起きてきた。あなたに会いたくて。
サリフ （インドネシア語）わかった。私に任せろ。インドネシアの田舎では、風疹や麻疹の子をゴザで直す！

サリフ、ワタナベを畳に寝かせる。
そして自分の持ち物の腰布（サルン）を取り出し、ワタナベに被る。

タチバナ どうする。

トシコ　インドネシアの田舎では、風疹や麻疹の子どもをゴザで直すそうです。
フジタ　ゴザで。
タチバナ　ふつうの風邪はどうです。
サワダ　大人だし。
フミ　……効くんじゃないですか。

　　サリフ、ワタナベの背中を畳に擦りあわせ、身体を回し、サルンでくるむ。
　　自分も同じ動作で誘導し、最後に手を突いて祈る。

サリフ　（インドネシア語）みんなも一緒に。
トシコ　皆さんもご一緒に。

　　自分の畳を一枚ずつ決めて、同じ動作をする人が次第に増えていく……。
　　それらの動作に囲まれ、あるいは、違う位相の空間に於いてか、ワタナベ、畳の上に起きあがる。

ワタナベ　ナカヤマさん。
ナカヤマ　……。
ワタナベ　ナカヤマさんのレジュメは難しくて、僕には、全部のことはわかりません。教師だった頃のあなたも知りません。……ただ一つ、信じられるコトバがあります。学友会の事務員として迎えられる前、あなたがいったん大学を離れると決めたときの

宣言。バリケード前からメガホンで語りかけた、「最後の授業」の終わりのフレーズと聞いています。
ナカヤマ　……。
ワタナベ　（韓国語）「最後の一人までが全体である」
サリフ　（インドネシア語）「最後の一人までが全体である」
ナカヤマ　「最後の一人までが全体である」

　　人々、「モスラの歌」を歌いながら、畳を片付けてゆく。
　　二十畳の畳は間引かれていって、住宅の中の四畳半に変わる。

フジタ　学生たちは時として、あなたをナカヤマ教官と呼びました。それがどういう感覚なのか、掴みかねることもありました。
ナカヤマ　……。
フジタ　「人類が知覚した全ての空間を教室とし、言語によって記述しうる時間の総体を授業時間とする」
ナカヤマ　……。
フジタ　それはどんな授業でしょう。あるいはあの日あの場所にいた僕も、ひょっとしたら、あなたの授業を受けていたのですか。
ナカヤマ　……。

　　フジタを残し、歌う人々と共に、ナカヤマも去ってゆく。
　　……フジタ、ゆっくりと四畳半の脇のエリアへ移動する。

※　都営住宅・二号棟３０４号室（２）　※

四畳半で、トースターレンジを囲んでいる、セツコ、ヒロコ、アットモ（ダルモ・スモノ）。アットモは「ＮＥＷ　ＹＯＲＫ」と書かれたイラストシャツを着ている。

セツコ　これが問題のトースター。
ヒロコ　トースターレンジ。
セツコ　でもレンジ壊れてるんでしょう。
ヒロコ　そうだけど。
セツコ　これをもらったわけ、お隣りの……、アットモさん。
アットモ　はい。
ヒロコ　ヤマモトさんに、インドネシアから来た人が電子レンジ欲しがってるって言っちゃった私が悪いんだけど。
セツコ　トースターしか使えない……。
ヒロコ　だからよ。だから怒ってるんでしょ、私。
アットモ　ヤマモトさん、悪くない。
ヒロコ　だけどね。壊れてるもの人にあげるのって、失礼でしょ。アットモさんがほしかったのは電子レンジ。トースターじゃない。あっても邪魔なだけ。そうでしょ。
アットモ　……はい。
ヒロコ　私、頭来ちゃって。つっ返そうと思って持ってったら、一度差し上げたものは引き取れませんって、ぬけぬけと。

セツコ　あなたが怒ってるのはあれね。ヤマモトさんが、アジアの国から来た外国人を差別して、つまり、貧乏だったりものがなかったりするだろうから壊れてるものだって喜んでもらうだろうと決めつけてる。そのことね。
ヒロコ　善意でもね、縮んじゃったり破れちゃったりして古着屋に卸せない服とかくれたって、そんなの誰だって着られないわけでしょ。
セツコ　不用品もらっても困るわね。
アットモ　リサイクル、地球に優しい、オーケー。でもいらないもの売らない、買わない、一番。……日本、家、狭い。でもいっぱい、もの買う。不思議。
セツコ　確かに狭いわね。
アットモ　ぼくの故郷（くに）の家、広い。
ヒロコ　（トースターを）どうしよう。捨てるのだってお金掛かるのに。
タケダ　預かっていいですよ。
ヒロコ　お願いできますか。
タケダ　だけど私使わないんですよね、トースター。パンは柔らかい方がいいから焼いたりしないし。
セツコ　お餅とか。
タケダ　網焼き。
ヒロコ　グラタン。
タケダ　食べたことない。
ヒロコ　嘘。
タケダ　嘘だけど。
セツコ　ここ置いといていいんじゃないの。

フジタ、出てくる。

フジタ　別に構いませんけど。
セツコ　あら(いたの)。
フジタ　(見て)……アットモ。そのシャツどうした。
アットモ　これ。
フジタ　うん。
アットモ　ヤマモトさん。もらった。

アットモのシャツにはニューヨークの世界貿易センタービルのイラストが描かれている。

ヒロコ　ツインタワー。
セツコ　あら。
ヒロコ　……なんで気づかなかったんだろう。
セツコ　ニューヨークの。
ヒロコ　まずいかなあ。
アットモ　なぜ。
フジタ　アットモさん、近所の子どもに「ビンラディン」て渾名、つけられちゃって。
セツコ　そう。
ヒロコ　下北沢、ビンラディン情報あるよね。携帯で日本語喋ってたって。
アットモ　ビンラディン、違う。

セツコ　髭はやしてるから。
フジタ　日曜に上野の西郷さんところ行ってごらん、ビンラディンだらけだ。
ヒロコ　そういう噂ながす人たちって、世界じゅうにどのくらいイスラム教徒がいるかとか、考えたことないんじゃないかな。
アットモ　……僕、このシャツ、着る。考える。着る。忘れない。だいじ。
セツコ　はい。
フジタ　……まあ、子どもたちだって本気で怖がったりしてるわけじゃないでしょう。
ヒロコ　でも私ね、テレビのニュースで「犯行は外国人ふうの男」っていうのが出るたび、頭来るのよね。
セツコ　どうして。
ヒロコ　だって、はっきりとした白人だったら、白人って言うじゃない。
セツコ　そうか。

ヒトミ(アットモの妻)、入ってくる。

ヒトミ　ごめんなさい。ちょっと、何か食べなかったでしょうね。
セツコ　ああ、お昼時だったわね。
フジタ　いちおう今ラマダンなので。
ヒトミ　昼間休んどかないとたいへんよ。今日、夜勤なんだから。
アットモ　(立ちつつ)沢山働く、つらい。過労死、こわい。
ヒトミ　すみません、いつもお邪魔しまして。
アットモ　さようなら。またあした。お世話様でした。
フジタ　また来てね。

アットモ　日本の挨拶、好き。「いらっしゃい」「いってきます」「おかえり」「ただいま」……。

アットモ、喋りながら、ヒトミと共に去る。
入れ替わりに、ヒラオカ、来る。

ヒラオカ　……ごめんください。

セツコ　はい。

ヒラオカ　ここでよかったんですか。３０４号室の、フジタさん。

フジタ　ええ。

ヒラオカ　ヒラオカといいます。

一瞬にして色めき立つ、セツコ、ヒロコ。
携帯電話をかける、ヒロコ。

ヒロコ　(電話に)来ました。一人です。時間に正確ね。

セツコ　頼まれたので同席させていただきます。名乗らないように言われていますので名前は言いません。

ヒラオカ　そうですか。

僅かな、間。

セツコ　……社会科の先生でしたっけ。

ヒラオカ　……はい。

セツコ　……参考までにお伺いしたいんですが、「新しい歴史教科書」、どう思われます。

ヒラオカ　どうって……。

セツコ　今年も四国の新設校で採択されたでしょ。去年はこの辺りでも、無理やり養護学校に採択させたり……、微妙な問題じゃないですか。

ヒラオカ　つまり、あれですね。生徒にセクハラ行為を働いた疑いをかけられている教師が、じっさいどのくらい反動的な考えを持っているか確かめたい、そうおっしゃるんですね。

セツコ　そうは言ってません。

ヒラオカ　私が教育委員なら「新しい歴史教科書」は採用しません。教科書として質がよくないからです。仁徳天皇陵をエジプトのクフ王のピラミッドや秦の始皇帝の墳墓より大きかったといいますが、どこからどこまでを墓というかが曖昧だし、だいたいどうして大きさを競争しなきゃならないのかわかりません。倭寇(明の時代の海賊)には日本人の他に朝鮮人もいたという指摘も、なぜ必要なのかわかりません。明治維新で帝国議会を設置したのが天皇の意志だったというのは誤りです。五箇条の御誓文の「広く議会を興し」というのはただこれから会議をいっぱいしましょうというだけのことだし、だったらなんで議会を開いたのが二十何年も後なんでしょう。江華島事件も明らかに朝鮮への侵略なのに、国交樹立のきっかけにされてしまってます。教育勅語を全部載せる理由がわかりません。与謝野晶子が女性の自立を目指していなかったというのは根拠がありません。関東大震災で朝鮮人を殺したのが軍や警察ではなく住民の自警団だったことにされている。中国の反日活動イコール共産主義勢力というのも事実無根、南京大虐殺を「南京事件」と言って、なかったことにしているのも嘘だ。従軍慰安婦も強制連行も記述されていないし、神風特攻隊が「全世界を驚

愕させる作戦」といって持ち上げられているのは客観性を欠いています。ひめゆり部隊の少女たちまでが勇敢に戦ったと書いてありますが、ひめゆり部隊は看護を仕事としていたのですから勇敢に戦ったというのはどうみてもヘンだ。

セツコ　……はい。

ヒロコ　……(フジタに)前から思ってるんですけど。

フジタ　はい。

ヒロコ　ここ、じきに退去命令来ますよ。住民票移さないんですか。

フジタ　……。

ヒロコ　都営住宅って、低収入で、住むところ困ってる人のための住宅でしょ。

フジタ　……実際、低収入ですけど。

ヒロコ　でも共働き。ローンっていっても、ちゃんとしたうち、別に買ったんでしょ。

フジタ　まあ。

ヒロコ　早く立ち退かないと、ほんとに困ってる、貧しい人たちに対して失礼ですよ。

セツコ　そういうこと言わない。ただで事務所に使わせてもらってるのに。

タケダ　……あれなんだが、我々は、ここにいなくてはいけないのかな。

セツコ　ちょっとどういうことになるかわからないんで、男の人にもいてもらいたいんです。

タケダ　そう？

　　ドアが開く。
　　入ってくる、アツコ、ハルヤマ、制服姿の女生徒キヨミ(フクシマ)。
　　出迎える、ヒロコ。

ハルヤマ　お世話になります。

ヒロコ　こちらに……。(四畳半に案内する)

ハルヤマ　それぞれ言い分は聞いてますので、私のほうからは何も言うことないんですけど……。

アツコ　処分の方はもう結論出てるんですって。

ハルヤマ　ヒラオカ先生がどうしてももう一度フクシマさんと話したいっていうので、場所をお借りすることにしました。

アツコ　(キヨミが)学校でも自宅でも話したくないって。

セツコ　それはそうでしょう。

ヒラオカ　……この人たちは。

ハルヤマ　立ち会っていただいて構いませんか。

ヒラオカ　少人数だと、私が何をするかわからないと？

ハルヤマ　そうは言ってません。

ヒラオカ　私は、自分がしていないことをしたと言われている。その虚偽の証言を撤回してもらいたい。それだけだ。……フクシマ君。

キヨミ　……。

ヒロコ　威圧しないで。

ヒラオカ　……。

アツコ　何も喋らない権利だってあると思うんですよ、こういう時。

ヒラオカ　君の証言では、君は、九月五日木曜日の放課後、私に「注意することがある」と呼ばれて、社会科の研究室に来た。

キヨミ　……。

ヒラオカ　そこまでは事実だ。私も事実と認める。……そうだな。

キヨミ　……はい。

ヒラオカ　君の証言では、私は君を机の上に座らせて、足を広げさせ、スカートの中に手を入れた。君はそう言ったんだな。

キヨミ　……。

ヒラオカ　言ったのか。

キヨミ　……先生は私を机の上に座らせて、足を広げさせて、スカートの中に手を入れました。

ヒラオカ　……。

キヨミ　それから、私に抱きついて、キスをしました。唇。首筋と、胸にも……。

ヒラオカ　……。

キヨミ　その間ずっと、スカートの中に入れた手を、下着の中に差し入れて、触り続けていました。

ヒラオカ　……そうか。

キヨミ　それから、私を机の上に押し倒して……。

ヒロコ　信じられない。こんなふうにもう一度言わせるなんて、二次セクハラよ。このセッティングは失敗。……(キヨミに)帰りましょう。

ヒラオカ　私はそんなことはしていない。

キヨミ　……。

ヒラオカ　正直に言ってくれ。私は君のからだに触れていない。……今ならなかったことにできる。

キヨミ　……。

ヒラオカ　今なら引き返せる。

キヨミ　(立とうとする)

ヒラオカ　自分の人生を壊したいのか。

ヒロコ　脅迫しないで。

ヒラオカ　冷静に考えていただければわかる。彼女の着ている制服はどうなってる。上半身の部分だ。ボタンもファスナーもない。私がスカートの下にずっと片手を差し入れていたとする。もう片方の手だけで、彼女にキスをしながら、胸をはだけさせることはできるか。不可能だ。

キヨミ　……。

セツコ　器用な人ならできるかも。

ヒロコ　気が動転していたら、記憶は曖昧でしょ。言葉尻で細かい揚げ足取っても、あなたの言いぶんが正しいってことにはならない。

ヒラオカ　……私は教師だ。そんなことはしない。

ヒロコ　セクハラで処分受けてる先生は毎年百人じゃきかない。教師もそういうことする時代なんでしょ。

ハルヤマ　授業中、彼女の肩に手を置いたことはあるって……。

ヒラオカ　あります。ふつうのスキンシップです。誰にでもします。

ハルヤマ　一度も手を置かれたことのない生徒もいます。肩に手を置くことの是非はともかく、ヒラオカ先生は生徒に対して選り好みをしている。

ヒラオカ　全員の肩に均等に手を置けばいいのですか。

ヒロコ　前いた学校じゃ、体罰で問題になったことあるそうじゃないですか。

ヒラオカ　フクシマ君。

ハルヤマ　もういいでしょう。(連れて行こうとする)

ヒラオカ　最後に一つだけ聞かせてくれ。……約束を破ることと、嘘をつくこと。どちらが悪い。

セツコ　……なに。
ヒラオカ　約束を破ることと、嘘をつくこと。
キヨミ　……。
ヒラオカ　私の約束と、君の嘘だ。……だが、はっきりさせておこう。君は嘘をついたが、私は約束を破っていない。

ヒラオカ、泣いている。

ヒラオカ　……私の父も、教師だった。教え子の秘密は墓場まで持っていけと教えられた。私は約束を守る。
キヨミ　……。
ヒラオカ　失礼。

ヒラオカ、去る。
ドアが閉まる。

ヒロコ　なによ、あれ。かっこつけて。
セツコ　どういう処分になるの。
ヒロコ　今みたいに言い張ったら、逃れられるものなの。
ハルヤマ　まあ、どんなに軽くても、今の学校にはいられないでしょう。
キヨミ　……ばっかみたい。
アツコ　ばっかみたい。
キヨミ　……。

アツコ　ばっかみたいね。
キヨミ　……フフ。
アツコ　男の人、潰しちゃうのって、簡単。これですっきりしたでしょ。
キヨミ　……。
アツコ　だけどあなたたいへんよ。あなたは間違ってない。あなたは正しい。だとすると、あなたこのままよ。もうやめられない。
キヨミ　なんですか。
アツコ　私調べたんだ、あなたのこと。
キヨミ　……。
アツコ　ヒラオカ先生は、あなたと約束したとか秘密だとか言ってたけど、ぜんぜん秘密じゃないんじゃない。
キヨミ　……誰に聞いたんですか。
アツコ　それは教えられない。
キヨミ　……。
アツコ　ていうか、あなたが自分でわかってるはずでしょ。知ってるとしたら、誰なのか。
キヨミ　……カマかけたって駄目ですよ。
アツコ　……それはどうかな。
キヨミ　……。
アツコ　気になる。
キヨミ　べつに。
アツコ　じゃ、いいのね。私、週刊誌に記事書いたりしてるの。時々だけど。
キヨミ　勝手なこと書かれちゃ困ります。
アツコ　ちゃんと匿名で書くわよ、未成年者だもん。

キヨミ　……。
アツコ　ほうら、もう見当ついてる。心配だったら自分で口止めして。私の所はもう手遅れだけど。
キヨミ　……アキ？
アツコ　（ノートを見て）オオサワアキさん。
キヨミ　うそ。
アツコ　……喋る気になった。
キヨミ　……フフ、それって名簿でしょ。アキは私がクラスで一番話しないひと。住む世界が違うの。やだな、大人って。引っかけるような真似して。……嘘なんでしょ、週刊誌に書いてるっていうのも。
アツコ　……。

急に入ってくる、ヒラオカ。
退く一同。
ヒラオカ、卓袱台の上に何枚かの一万円札を置く。

ヒロコ　ちょっと……。
ヒラオカ　これでどうだ。
セツコ　なんです。
ヒラオカ　フクシマ君。私は教師をやめる。やめると決めたら何でもできると思った。約束も破る。……ここに五万円ある。これで君を買おう。
キヨミ　……。
ハルヤマ　ヒラオカ先生。

ヒラオカ　もう先生じゃない。
ヒロコ　（フジタとタケダに）ちょっと止めてよ、この人。
ヒロコ　ご自分が何をおっしゃってるか、わかっておられます。
セツコ　ここにいるのは裸のヒラオカだ。裸のヒラオカに秘密はない。
ヒラオカ　先生、わかってない。
キヨミ　……。
ヒラオカ　私、七万以下じゃ売らないの。
キヨミ

キヨミ、駆け去る。
ハルヤマ、追う。

ハルヤマ　待ちなさい。（去る）
ヒロコ　うそ。そういうことなの。
タケダ　別に珍しくもない。援助交際なんて十五年前からあるよ。
セツコ　じゃあ、ヒラオカ先生、あの子がそうしてるのを隠そうとして、なのにあの子は、露見することを恐れて先生にぬれぎぬを……。
ヒラオカ　教えてくれたのは、オオサワアキ、フクシマと一番仲の悪い子でした。最初は半信半疑でした。でもフクシマは私がそれとなく調べていることに気づいて、私を避けるようになりました。
ヒロコ　あんちくしょう。
タケダ　（アツコに）あなたはあの子のことほんとに調べたの。
アツコ　優しくて面倒見のいい先生と、明るいクラスのムードメーカー。みんな言ってたのは、それだけ。

ヒラオカ　週休二日制がいけないんです。
セツコ　え。
ヒラオカ　私は土曜日が好きでした。特に放課後。子どもの頃からです。しかし今年度から完全週休二日、土曜日も休みになりました。そのぶん平日は六時間目が増えて、子供の方もしんどい。逆に連休になると時間をもてあます。やらなくてもいいことを始めてしまう。
タケダ　はい。
ヒラオカ　連休明けの教室はいつもざわついてる。生徒はみんな、慌ててお互いを確かめ合っているんです。土曜と日曜で、何かがとぎれてるようで不安なんです。
ヒロコ　それで非行に走るっていうの。
ヒラオカ　土曜日の午後を返してください。校内に大勢の生徒がいた名残りと、自由な空気が混じりあった、不思議な開放感……。土曜日の子どもたちを返してください。

　いつのまにか現れて見ていた、ナカヤマ。

タケダ　どうも君には癖があるようだね。
フジタ　はい。
タケダ　登場人物に自分の知り合いを当てはめて考えてしまう……。

　ナカヤマ、ヒラオカと交替してその位置に座る。
　ヒラオカ、去る。
　ヒロコは一九八七年の別人である編み物をする妊婦のヒロコに、セツコはナカヤマの妻に存在を変えてゆく。

※　Ｒd棟４０３号室（２）　※

　アツコは畳に寝転がって、畳の目を数えている。

妻　ここ出て何年後だったかしら、ここの大学のこと知ってるって人が教えてくれた。あなたが宿舎を若者に開放して、乱交部屋にしてるって。私と子どもの部屋だったのに。
ナカヤマ　そりゃすごい。
妻　あなたの理想のコミューン。
ナカヤマ　ただの四畳半。
妻　……この子、おなか大きいじゃない。
ヒロコ　(おなかの子がナカヤマと)血縁関係ないよ。
妻　そんなことどうだっていい。
ナカヤマ　何年ぶりだっけ。
妻　会うのは十年ぶり。来たのはあれ以来。
ナカヤマ　……。
妻　確かに頂きましたから。

　妻、書類をしまう。

妻　もっと早くすませとくんだった。
ナカヤマ　君が言い出したんだよ、子どもがもう少し大きくなるまで、籍はこのままにしときましょうって。
妻　畳、変えればいいのに。ひどい色。
ナカヤマ　うん。

妻　女房と畳は新しい方がよい。
ナカヤマ　……。
妻　新しい畳でも叩けば埃が出るのよ。
ナカヤマ　おまえは立派なところに住んでるのか。
ヒロコ　うわあ。
妻　実家は庭も広いし、とりあえずアキオは「団地の子、団地の子」って言われずにすみました。
ナカヤマ　これ、アキオに。

ナカヤマ、妻に紙包みを渡す。

妻　またピストル。
ナカヤマ　なんでわかるの。
妻　……馬鹿の一つ覚え。高校生がピストルの玩具で喜ぶかどうかわからないけど渡しとく。
ナカヤマ　一応モデルガンだ。
妻　あなたは西部劇が好きなのよ。
ナカヤマ　なに。
妻　テレビでやってるといつも観てた。
ナカヤマ　そう？
妻　東京から流れてきたガンマン教師。秩序を失った宿場町大学で、正義の味方になろうと思った。
ナカヤマ　ふーむ。

妻　けど誰もあなたをシェリフに推薦しなかった。ふつうのガンマンならまた旅立つ。
ナカヤマ　流れ流れて四畳半。
妻　旅してるはずが同じ場所に籠もってた。
ナカヤマ　……。
アツコ　流れ者には女はいらねえ。
妻　あんた何してんの。
アツコ　畳の目数えたことあります？
妻　いいえ。
アツコ　けっこう時間掛かるんですよ。七千から先でいつもわからなくなっちゃう。
妻　暇なのね。
アツコ　ナカヤマ先生とは寝てません。お金くれないから。
妻　……こういう環境だから、聞かせてもらいましょうか。
ナカヤマ　なんだ。
妻　「緒方保子」って、誰です。
ナカヤマ　……。
妻　あなたが全員八十点の成績表、郵送したときの名義。ナカヤマ教官の「教務係」。
ナカヤマ　……さあ。
妻　昔の彼女。
ナカヤマ　知らない。
妻　どこの女ですか。
ナカヤマ　……内緒だ。
妻　みんなに後ろ指さされたのよ。あなたの旦那は、愛人の名前で成績表を送った。
ナカヤマ　……おまじないみたいなもんだよ。

妻　なに？

ナカヤマ　そういう名前の女はどこにもいない。

妻　あの成績表が決め手だったのよ、あなたがクビ切られたの。「名前が付いていないためナカヤマ教官自身が出したものと認めることができない。少なくとも、授業の成績判定の権利を放棄したものと認めざるを得ない」

ナカヤマ　……。

妻　同情してくれたわ。あなたの問題でここに通ってた大学の人。「お子さんも小さいことだしね」。それがどういう日本語か、最初は意味がわからなかった。でもあれって、ほんとね。「お子さんも小さいことだしね」……。あれで私は荷物まとめる気になったの。だってあなたはいつも言ってたのよ。「この子は俺の子ではない」って。「子どもに所有格をつけたいならさらっていけ」。そう。小さかったのよ、あの子。ほんとに小さかった。……そうよ、だから私、洗いざらい喋ったの。あなたのこと、交友関係、何もかも、その人に。

ナカヤマ　……。

　　四畳半の外で、携帯電話をかけるフジタ。
　　妻（セツコ）、ヒロコ、アツコ、去る。
　　ナカヤマもゆっくりと立つ。

タケダ　誰にかけてるの。

フジタ　彼女です。

タケダ　その時代にはないはずだよ、携帯。

フジタ　……。

　　電話に相手が出る。

フジタ　……そうだよ。ほんとは今、東京に戻ってる。来なくていいよ。どうせすぐ行くんだから、大学祭の前から現地に入って手伝う。しょうがないだろ、約束したんだから。

※　都営住宅・二号棟３０４号室（３）　※

中にいるのは、タケダだけである。
鍵を開ける音。
ユキエ、入ってくる。
遠くに響いている、拡声器から流されているらしい、「軍艦マーチ」。

タケダ　どなた。
ユキエ　……どなたって、そちらこそどなた。
タケダ　名乗るほどの者じゃございません。でも名乗っちゃいます。タケダといいます。
ユキエ　……フジタユキエです。ああ、なんて言えばいいんだろう。そうか。フジタの家内です。
タケダ　おられませんよ、今。
ユキエ　うちの人、しばらく、帰ってこないもんで。ここ、引き払わないのも少しの間はいいんだけど、そんなにいつまでも明け渡さないわけにはいかないでしょう。そういう話もできなくて。
タケダ　ご心配でしたね。
ユキエ　……(あなたは)連絡係とかなさってる。住民運動の。
タケダ　ええ。
ユキエ　(フジタが)ここにいることはいるんですか。
タケダ　仕事してるみたいですよ。

ユキエ　はい。
タケダ　台本。
ユキエ　進んでるみたいですか。
タケダ　たぶん。
ユキエ　……私が出てくるらしいんです。
タケダ　そうですか。
ユキエ　もともと、しょっちゅう使われちゃってるんですけどね。口癖とか、ふだんのドジ。
タケダ　ああ。
ユキエ　昔の、大学祭の話。
タケダ　聞きましたか。
ユキエ　雑誌で読んだんです。
タケダ　……なんだか騒がしいですね、外。
ユキエ　運動会だったんです。うちの小学校。……午後から来ちゃって、街宣車とか。
タケダ　どうして。
ユキエ　全国的にはどうか知りませんけど、うちの小学校、運動会で日の丸揚げないんです。そういう伝統みたいで。ちゃんと生徒会で決めてるんです。そしたら校長が、勝手に日の丸揚げちゃったんで、騒ぎになって。
タケダ　ほう。
ユキエ　お昼の時間に、生徒と一部の父兄が、校長先生の所に話に行ったんです。「約束を守って」「どうして私たちに無断で揚げたんですか」
タケダ　子どもが。
ユキエ　ええ。校長はすぐ謝りました。「君たちの気持ちを傷つけたことは悪かった

と思う」。……いえ、すぐじゃなかったんです。いったん校長が逃げ腰になったので、子どもたちが口々に文句を言って。そう、一人の子が言ったんです。「説明もしないで揚げるなんて卑怯だ。土下座して謝ってもいいくらいだよ」

タケダ　はい。

ユキエ　日の丸降ろした後、教育委員か職員の一人が「さっき土下座って言ったやつ、責任取れよ」って、駆けだして……、なんだか、帰る頃には表に人がいっぱい。

タケダ　……なるほど。

ユキエ　土下座の話が妙に膨らんじゃって。言ったのは一回だけだし、その場じゃ誰も気にとめなかったくらいなんです。私、見てましたから。子どもが土下座なんて言うのはヘンだって人もいたけど、子どもって、覚えたコトバ、すぐ使ってみたいものでしょう。

タケダ　そうですね。

ユキエ　……後でなんですけど、土下座って言った子のお父さん、お母さんを……、自分の奥さんをひっぱたいちゃって。子ども連れて帰っちゃったんです。

タケダ　それは。

ユキエ　見てたらなんだか落ち着かなくなっちゃって。すみません、ひとりでべらべら。……(時計見て)閉会式(だからそろそろ行かなきゃ)。

タケダ　どうしましょうか。えっと。何か言付けでも。

ユキエ　あー、やだ、……なんにも言わなくていいです。

タケダ　そ。

ユキエ　……じゃ、お邪魔しました。

タケダ　お構いもいたしませんで。

ユキエ　なんだかヘンですね。自分が住んでたところなのに……。

タケダ　いえいえ。

ユキエ　それじゃ。

ユキエ、去る。

※　Ｒｄ棟４０３号室（３）　※

ドアを激しくノックする、アツコ。
タケダ、四畳半から離れる。
ナカヤマ、ドアを開けに行く。

ナカヤマ　鍵は掛かってないよ。

入ってくる、アツコ。

ナカヤマ　……十五年たったら、日本はどうなると思う。
アツコ　……。
ナカヤマ　学校の日の丸掲揚率は、限りなく百パーセントに近くなっている。
アツコ　そう。
ナカヤマ　日本は戦争のできる国になってる。有事法制が議会にかけられ、拡大解釈で先制的に他国を攻撃することまで認めようとしている。国民の協力義務も定められる。自衛隊が命令を出して、例えば今急にこの部屋に入ってきてここを前線基地にするぞって言われたら、明け渡さなきゃならない。反対すれば逮捕。
アツコ　ここが真っ先にやられるわね。
ナカヤマ　……ニューヨークの貿易センタービルにハイジャックされた飛行機が突っ込む。キリスト教では復讐することは認められないから、大統領はこれを戦争と規定し、第三次世界大戦を宣言して、気に入らない国を攻撃し始める。とばっちりでパレ

スチナは壊滅的な攻撃を受ける。イスラエルはパレスチナ民族を滅亡させせると公言している。
アツコ　フジタさんの芝居？
ナカヤマ　ほとんどＳＦだね。
アツコ　私は現実の方が怖いわ。
ナカヤマ　また誰かにつけられた。
アツコ　……真に受けてないのね。
ナカヤマ　どうしてそう思う。
アツコ　そんな顔してる。
ナカヤマ　どうして君はわざわざ誰かにつけられてるふりをする必要がある。
アツコ　ここに来るための口実？
ナカヤマ　……。
アツコ　……私がスパイだっていうの。
ナカヤマ　なんのスパイ。
アツコ　……。
ナカヤマ　運動家としての私の強みは、徹底して裏表がないことだ。そばに寄らなくたって、やってることは丸見えだ。強みであると同時に、弱点。
アツコ　そうね。私はスパイ。……自分のポジションを奪い取るための。
ナカヤマ　どんな。
アツコ　Ｎ教官の教務係、「緒方保子」。でもその人って、実在しないんでしょう。……誰か必要なんじゃないの。Ｎ教官の、実在する教務係。
ナカヤマ　そんなこと考えてたの。
アツコ　他に誰かいると言い出せない。

ナカヤマ　その教務係は、何をしてくれる。

アツコ　N教官の、大事な仕事を作る。

ナカヤマ　何をする。

アツコ　救い出すの。一番大切な教え子を。

ナカヤマ　……その教え子はどんな目に遭ってる。

アツコ　自分をもてあましてる。身体を、心を、未来を、もてあましてる。

ナカヤマ　どうして。

アツコ　嫌いだから。

ナカヤマ　……。

アツコ　自分の顔。心にもない笑顔。相手の顔色覗き込む目。声。媚びを売るみたいな作り声。胸から喉にかかった自意識。寂しがり屋なのにうぬぼれ。自意識過剰のくせに鈍感。相手が困惑してるのがわかってても話し続けるのをやめる勇気がない。自分がひとと違うと思ってもらえないと満たされない。世界のことなんかまじめに考えられない。自分自身さえ抑えきれないのに。運動に本気で取り組めない。なのにいつも先頭に立ってるふりをする。

ナカヤマ　この世で一番堅牢な牢獄がある。自己否定という名前の牢獄。

アツコ　……脱出できる？

ナカヤマ　自分で出るしかない。わかってるはずだ。

アツコ　そうなの。

ナカヤマ　世界と出会うことは、自分と出会うことだ。

アツコ　……私が誰かに追われてるのは事実よ。

ナカヤマ　……。

アツコ　もしも私が、ほんとうは誰にも追いかけられていないんだとしたら。

ナカヤマ　うん。

アツコ　私、狂ってる。

ナカヤマ　……。

※　都営住宅・二号棟３０４号室（４）　※

鍵を開ける音。
ナカヤマ、離れる。
フジタ、外から入ってきて、電気をつける。
アツコがいることに気づく。

フジタ　……どうしたんです。
アツコ　ごめんなさい。あいてたから。
フジタ　そうですか。
アツコ　なんだか、誰かに追いかけられてるような気がして。……早足で逃げてたら、ちょうどここの表に来たので。
フジタ　追いかけられるって……。
アツコ　最近、よくそういうことあるんで。
フジタ　心当たりあるんですか。
アツコ　こないだの運動会で、校長先生に「約束破ったんだから土下座してもいいくらいだよ」って言ったのは、うちの子なんです。
フジタ　……お子さんは大丈夫ですか。
アツコ　クラスの子はいいんです。あの子のことよく知ってくれてますから。けど、よく事情を知らない人から「非国民の子」「オウムの子」って苛められるんです。
フジタ　……。
アツコ　あの事件は一部のマスコミによって「土下座事件」としてセンセーショナル

に報道されたでしょう。このあたりは「住基ネット」も入っていないし、なんだか「非国民の町」ってキャンペーン張られてるみたい。
フジタ　お子さんは、送り迎えなさってる。
アツコ　別居中の夫が。実家だからお祖父ちゃんたちいて助かってます。一人にしておく訳にはいかないので。
フジタ　……脅迫状来たって、ほんとですか。
アツコ　「コドモヲユウカイシテコロス」って。こないだも私の名を騙って学校に早退を申し込む電話があって、それがどうも誘拐の手口だったみたいなんです。
フジタ　その後お子さんには。
アツコ　会わせてくれないんです。旦那が。「校長に土下座しろって言わせたのはおまえだろう」「ふつうの子供がそんなことを言うはずがない」。……失礼な話よね。自分の子どもがちゃんと自分の考えを言ったのに。
フジタ　……その後学校ではこの問題、話し合われてるんでしょうか。
アツコ　「揚げる揚げないだけの議論はやめよう」って、それっきり。あれじゃ「ゆとりの教育」じゃなくて、「言うとおりの教育」ね。
フジタ　そのフレーズは知ってます。読みました。週刊誌に載った、あなたの手記。
アツコ　ペンネームだったけど。
フジタ　原稿を持ち込んだ?
アツコ　いけないかな。けっこういるのよね。あなたは子どもを利用してるのかって言う人。
フジタ　はっきり言いましょう。あなたの文章は、自分の子どもがそういう発言をして、自分が当事者になった。そのことをあなた自身が歓迎している。読んだ人間はみんなそう思う。それは狙いですか。

アツコ　ごりっぱね。でも、そう、狙いなの。

フジタ　どんな。

アツコ　読者は求めてるんじゃない。そういう鈍感さ。愚かさを。

フジタ　……。

アツコ　自分がぶざまに見えるかもしれない、でもそのハードルを越えないと伝わらないこともあるはず。

フジタ　……そうですか。

アツコ　今夜泊めてくださらない。

フジタ　仮眠用の毛布しかありません。

アツコ　畳に毛布。それでじゅうぶん。

フジタ　……。

アツコ　ずっと考えてたんです。外泊してみようかな。携帯を切って。誰にも教えず。

フジタ　それはまずいでしょう。

アツコ　駄目かしら。

フジタ　僕はよそに行きます。

アツコ　……いつだったか、援助交際してたって子、来たでしょう。……きっとまわりは思ってるんでしょうね。一度でも「ウリ」をやった人間は、元に戻れないって……。

フジタ　どうでしょう。

アツコ　じゃあなんでみんな訊かないの。一度でも女を買ったことのある男が、その後ふつうに社会生活送れてるかどうかって。

フジタ　……。

アツコ　私もお金で自分を売ったことがあるんです。……ねえ。でも文章を書くって、結局、同じことでしょう。自分をさらして、売るのよ。

フジタ　……。

アツコ　幻滅した?

フジタ　いいえ……。

アツコ　行かないでください。

フジタ　……。

アツコ　行かないで。

※　大学・学友会事務室　※

周囲から聞こえている、大学祭開催中の喧噪……。
カイ、ハセガワ、タナカ、フミ、ワタナベ、セノオら、真ん中の四畳半を残して、まわりの机や椅子、道具類を動かしている。
畳の上で所在なげな、アッコ。
立ち上がって皆を手伝う、フジタ。
畳の上に上がってきて、ギターを爪弾いたりしている、ナカヤマ。

セノオ　……どうして学友会事務室に畳敷くんです。
ナカヤマ　学友会事務室は大学祭期間中の作戦本部。実行委員は歩き回って働いてなんぼだ。日中デスクワークにかかってる余裕はない。
アッコ　畳の方がおおぜい休憩できるし。
フミ　そうなんでしょうけど。
ワタナベ　やっぱり問い合わせ来てますよ。〈非〉大学祭って、実際はやらないってことかと思ったら、やってるんですかって。
ナカヤマ　去年やらなかったからって、別に変わったわけじゃないなあ。バラバラの企画、子供じみたバザー、模擬店の寄せ集め。
カイ　前よりちゃんとゴミ捨てるようになってます。
アッコ　体育会系のサークルはよそよそしいけど。
ハセガワ　気をつけた方がいいですよ。なんか、探ってる感じなんですよね、こっちの様子。
カイ　いろいろまわりの目も厳しいから、こっちもちゃんとやらなきゃ。

セノオ　リーダー格が最後の確認しないで、テント残って飲んでるサークルは駄目だな。
タナカ　俺たちだって飲みたいよ。
ハセガワ　開催期間中スタッフは禁酒。あと一日我慢して美酒に浸ろうよ。

サワダ、クボ、入ってくる。

サワダ　芝居観ましたよ。
フジタ　どうも。
サワダ　あれ、この畳、昨日の芝居で使ってたやつ。
タナカ　やっぱりそうなの。
サワダ　捨てちゃうんですか？
フジタ　裏に細工しちゃってるから、どのみちふつうの家じゃ使えないんじゃないかな。
ナカヤマ　あの芝居、またやる？
フジタ　再演するかどうかわかりませんけど。
ナカヤマ　もう一回やるってときは返すから、貸しといて。
フジタ　いいですけど。
カイ　返すって、東京とか、沖縄とかで公演があっても持っていくんですか。
ナカヤマ　いいんじゃない。
カイ　安請け合いしないでくださいよ。
ナカヤマ　なんか具合いいんだ。しっくりくるね、ここに四畳半あると。
ハセガワ　狭いですよー。
サワダ　こういう部屋の中に置くとなおさら狭く感じるもんですよ。
カイ　狭いっていうのは、周りのこと。

タナカ　あるんじゃなかったっけ、京間とか江戸間とか。
サワダ　団地サイズでしょう。たいてい百七十二センチ。
ナカヤマ　詳しいね。
サワダ　引っ越しのバイトしてるんで。
ナカヤマ　日本人の体格が良くなってるのに畳だけは縮んでる。
ハセガワ　一畳を小さくすると坪数ごまかせるからじゃない。
サワダ　そうか、じゃあ家も小さくなってるんだ。
タナカ　なんかヘンだ。
ハセガワ　ヘンだね。

　机など置き直して、室内の整理がついた様子。
　ノガミ、来る。

ノガミ　カイ先輩、タナカさん、ちょっといいですか。
カイ　はい。なに。
ノガミ　隣のワンダーフォーゲル部の者なんですけど、ちょっと、映研のテントに来てくれって。
カイ　ええ？
タナカ　もう始まってるでしょ、午後の上映。
ノガミ　伝言頼まれて。とにかく来てください。
カイ　もう……。

　ノガミ、カイ、タナカ、去る。

　ユキエ、来ている。
　フジタ、気づいてそばに寄る。

ユキエ　劇団の人に訊いたらここだって。
フジタ　……どうして。
ユキエ　来ちゃった。
フジタ　……。
ユキエ　昨夜、芝居に間に合わせたかったんだけど、会社、抜けられなくて。
フジタ　そう。
ユキエ　フフ。
フジタ　どうするの。
ユキエ　いいよ、気にしなくて。適当にぶらぶらしてるから。
フジタ　……ちょっと。

　フジタ、ユキエ、去る。
　その方角に視線は送らずに、外に出るアツコ。
　サワダ、クボ、去る。
　ハセガワ、フミ、ワタナベ、セノオらも、新たな場所で各自の仕事をし、あるいは、外に行く。
　タチバナ、来ている。
　ナカヤマの隣りに座る。

タチバナ　……なんか、いい感じだな。

ナカヤマ　そうか。
タチバナ　平和だな。いや、平和なんて表面だけの話だ。
ナカヤマ　……。
タチバナ　ここんとこ、レーガンとゴルバチョフがしょっちゅう会ってる。世界は変わるぞ。
ナカヤマ　……ソビエトがなくなるってか。
タチバナ　逆だ。全面戦争。いずれ核を使うだろう。
ナカヤマ　どの国が。
タチバナ　わからん。

タチバナ、畳の上にごろんと横になる。

タチバナ　俺、畳見ると昼寝したくなる。昼寝中にころっと死ぬのが最高の死に方だ。
ナカヤマ　……なんだ。
タチバナ　……。
ナカヤマ　何か言いたいことがあるから来たんだろう。
タチバナ　当初大学は、君には教祖性がないからと言って安心していたが、見込み違いだった。こんなに続くとは思わなかった。よくやったよ。
ナカヤマ　……。
タチバナ　一部の学生はまだおまえを持ち上げるだろうが、あの頃のことを知ってる人間はもうどこにもいない。時代は一巡りだ。昔の名前で出ていますっていっても、シーラカンスを目撃した人間はいない。N教官と聞いて誰のことかわかる学生は一握りだ。

ナカヤマ　結論は。
タチバナ　「本学を懲戒免職となった人物が、本学の付属組織である大学学友会の嘱託員をしているのはのぞましくない」
ナカヤマ　どうして君が学長の代弁をする。
タチバナ　大学相手の裁判に勝てると思うのか。
ナカヤマ　終わるまで続ける。
タチバナ　……動きがあることはわかってるんだろう。
ナカヤマ　……。
タチバナ　他のことはみんなついでだ。君を追いだすのが目的だ。
ナカヤマ　俺がいなけりゃ、代わりに党派の連中が居座るぞ。
タチバナ　そんな時代じゃない。
ナカヤマ　キャンパスには新宗教だって入り込んでる。

タチバナ、立つ。

タチバナ　「最後の一人までが全体である」
ナカヤマ　……。
タチバナ　一人がみんなのために。みんなが一人のために。些か陳腐な社会主義じゃないか。結局、君がその最後の一人か。
ナカヤマ　……。
タチバナ　本題は短いぞ。今度こっちに大手の予備校が進出してくる。小論文と英語の講師を捜していると相談された。いつでも推薦する。
ナカヤマ　知ってんだぞ。おまえが学生に言ったこと。「ナカヤマ先生の授業に出ても

力がつきません。もっといい授業があるでしょう」「ナカヤマ先生は今度は全員不可にすると言っていた」

タチバナ　御陰でみんな俺の所に来た。

ナカヤマ　……。

タチバナ　採点も評価も好きにすればいい。予備校だからな。

タチバナ、去る。

その表。

ユキエとフジタ、来る。

フジタ　……それを言いにきたわけ。

ユキエ　きっとかわいいと思うんだ。私が半分、あなたが半分だもん。

フジタ　そういう問題じゃなくて。

ユキエ　男の子だと思う。

フジタ　なんで。

ユキエ　直感。

フジタ　……。

ユキエ　やだ。急に恥ずかしくなってきた。

フジタ　無理だよ。

ユキエ　もしもいずれ、あんたと私が結婚して、もうどっちもけっこういい歳で、いざ子供ほしいと思ってもできなくて……、そうしたら死ぬほど後悔するよ。

フジタ　……想像してるわけだな。

ユキエ　（自分のおなかを触って）いいえ想像じゃありません。

荷物を背負ったヒロコ、来る。

ヒロコ　……あら、あなた演劇の。

フジタ　はい。

ヒロコ　もうこっちで彼女作ったの。

フジタ　なに言ってんです。

ユキエ　東京から来ました。エトウユキエです。

ヒロコ　劇団の子。

ユキエ　いいえ。

ヒロコ　……そう。

ユキエ　東京じゃ公演の受付、手伝ってるんですけどね、ずっと。

ヒロコ　なんか嬉しい？

ユキエ　はい？

ヒロコ　すっごい楽しそうに見えるから。

ユキエ　わあ。

ヒロコ　明るい性格ね。

ユキエ　よくそう言われます。

ヒロコ　私、明るくないの。

ユキエ　そうなんですか。

ヒロコ　しかも今、父親の違う兄弟（うち一人腹の中）を抱え、同居人に何も告げず、傷心のまま田舎に帰ろうとしている。

ユキエ　すごい。

ヒロコ　どうせ追いだされるのよ、あの職員宿舎。今までなんとか持ちこたえてきたけど、こんど控訴棄却されちゃったら、強制執行。(周囲の喧噪を見回し)考えてみたら私まだ籍あるのよね、大学。

ユキエ　がんばってください。

ヒロコ　ありがと。……さよなら。

フジタ　さよなら。

　　ヒロコ、去る。

ユキエ　いつ東京に戻る。荷造り終わって一休みしたら(ここを)出るんでしょ、劇団のトラック。

フジタ　もう少しこっちいる。

ユキエ　芝居終わったのに。

フジタ　見届けたいんだ。学園祭、終わるの。

ユキエ　すっごいひさしぶり、こういうとこ。……大人は学園祭なんて来ないもんね。

フジタ　大人かな。

ユキエ　どうする。フジタケンイチ。

フジタ　どうしようもない。

ユキエ　産めるわけないか。

フジタ　……うん。

ユキエ　そうね。(ト書きのように)とユキエが言う。ケンイチ、安心する。

フジタ　……。

ユキエ　(ト書きのように)そして、ユキエは、ケンイチのその表情を見て、先程までの明るさとは裏腹に、泣きながらくずおれるのであった。

　　ユキエ、じっさいに泣きながらくずおれる。
　　ユキエを抱えようとする、フジタ。
　　アツコ、来る。
　　ユキエとフジタの前に立ち尽くす。
　　ユキエ、気づく。

ユキエ　……どうしたの。

　　アツコ、急にフジタにしがみついて、キスをする。
　　そして、踵を返して去る。
　　茫然とするフジタ、ユキエ、残される。
　　……ユキエ、フジタに接近する。
　　自分もフジタにキスする。
　　そして、フジタの身体、背中を、腕を、肩を、ドンドン叩く。
　　為すに任せる、フジタ……。

　　事務局内。
　　ナカヤマの姿も消えている。
　　室内では、椅子に座らされた男(ヒラオカに似ている)を、サングラスを弄ぶサワダ、セノオが囲んでいる。

ハセガワ、来る。

サワダ　なんでサングラスなんかしてたんだよ。今日はそんなに陽が照ってるわけじゃないだろ。

男　……。

ハセガワ　(来て)また何かの稽古？

サワダ　怪しいんです、こいつ。事務局にたまたま誰もいなかったら、こいつがね、勝手に入り込んでたんです。

男　……。

サワダ　黙秘してるんです。

セノオ　あんた三浦和義に似てるね。

ハセガワ　学生じゃないな。

サワダ　こないだも、一年の寮生にアルバイト紹介するって近づいてきた中年男が、学友会潰す工作持ちかけてたってこと、あったじゃないですか。

セノオ　現実にあるのかな、スパイとか、そういうの。

サワダ　何するかわからない連中っていますよ。朝日新聞の支局に散弾銃打ち込んだやつなんか……。

ハセガワ　最近我々の動きはいち早く察知されてる。何かおかしいとは思うんだ。

戻ってくる、アツコ、続いて、フミ。
アツコ、男に気づいて踵を返そうとする。
男、不意にサワダを押しのけ、アツコに飛びかかる。
サワダ、セノオ、ハセガワ、引き離す。

ワタナベ、ナカヤマ、クボ、来る。

サワダ　ちくしょう。だからいわんこっちゃない。

フミ　……あなた、なんなの。

男　……アツコの恋人です。

サワダ　なんだあ？

フミ　恋人だからって、乱暴していいの。

ハセガワ　最近の判例じゃ夫婦間でも婦女暴行が成立するんだよ。

アツコ、急に男に歩み寄ると、蹴り始める。
慌てて抑える一同。

サワダ　この野郎。(手を振り上げるのを止められる)

男　殴りたいなら殴れ。暴力に頼るものは暴力によって滅ぶ。……どんなに君が肉体を誇っても、マイク・タイソンには勝てない。

サワダ　なんだ。

ナカヤマ　公安じゃないな。

ワタナベ　どうして。

ナカヤマ　声でわかるんだ。なんとなく。

クボ　(サワダに)そろそろ行かないと。もうすぐだよ、僕たちの公演。

サワダ　やっちゃいましょう。

ナカヤマ　いやいやいや。

ハセガワ　リンチしてどうすんだ、俺たちが。

一同、もう一度男を椅子に座らせる。
フジタ、来る。

男　……すまん。
アツコ　……。
男　大学には来るなと言われていたのに来てしまった。
アツコ　……。
サワダ　誰なんだ、こいつは。
アツコ　……私のパパ。
サワダ　パパ。
アツコ　「愛人」。
セノオ　ちょっと、なに言ってんだよ。
アツコ　私のパトロン。週に一回寝て、お金貰ってる。
フミ　なに、それって、ほんとだったの。
ハセガワ　知ってたの。
フミ　どうして発掘調査のバイトやめたのって聞いたら……。真に受けなかったけど。信じられない。
アツコ　どうしてあなたがそれを言うの。私は自分の意志でそうしてるの。
ナカヤマ　それも「性の自己決定」の範疇か。
ハセガワ　お金で女を好きにしようと思っている男に、そんな理屈、関係ないんだよ。
アツコ　どうしてわかるの。
フミ　やめてよ。

サワダ　それって、自分が「自由」だって、確かめてるわけですか。
アツコ　だれに決められるの、そんなこと。だって、そうでしょう。……私の身体は、私自身のものでさえないんだから。
フミ　どうしてそんなことといえるの。
アツコ　確かめたからよ。自分の身体を使って。
ナカヤマ　……人払い。みんな、外してやれ。

ナカヤマ、男、アツコを残して、皆、外に出る。
アツコと去りかけたフジタ、目が合う。

ナカヤマ　みんなの前で言ったのは、なぜだ。
アツコ　別に隠してない。
ナカヤマ　みんなはどう思う。
アツコ　あなた言い続けてきたんじゃない。自分を解体しろ解体しろって。
ナカヤマ　……。
アツコ　……最後の一人までが全体である。あなたがそう思うのは勝手。でもそれって、やっぱり全体主義。みんなみんなって、全体があっての思想でしょう。私は全体に染まるのは嫌なの。
ナカヤマ　だが君も、みんなをあてにしている。
アツコ　……。
ナカヤマ　みんなに言うことで、みんなをあてにしている。みんなから気持ちを貰おうとしている。

アツコ、去る。
フジタ、追おうとするが、躊躇する。

ナカヤマ　……職員宿舎の前で待ち伏せしてたのは、あんたか。

男　一度だけですよ。

ナカヤマ　一度だけ。

男　……ええ。

ナカヤマ　ほんとうか。

男　……僕も上がったことがあるんです、あの部屋。鍵が掛かってないでしょう。

ナカヤマ　アツコ君が誘った？

男　他に誰もいなくて……、彼女を抱いたんです、あの四畳半で。

ナカヤマ　……。

男　ここは架空の場所。ここじゃないどこかにいくための四畳半。その試みのための場所。……そういう場所を発明したのは、あなたなんでしょう。

ナカヤマ　……。

男　最初は金の関係なんかじゃなかった。ただふつうにつきあっていた。

ナカヤマ　どうして金を渡したりなんかしたんだ。

男　お金をちょうだい、愛人契約にしようよ、最初そう言われたときは確かに驚きました。でも、ちょっとお金に困って甘えている。ただお金をくれと言うことに照れてる、そういう意味だと思いました。

ナカヤマ　なぜやめなかった。

男　なぜだかわかりません。お金を貰わなくても会う関係から、お金を貰って会う関係。それがお金を貰いたくも会いたくもなくなってしまったというだけ。そうなんでしょう。

ナカヤマ　……。

男　……あいつがあの四畳半に連れ込んだのは、僕だけじゃありません。

男、去る。
フジタ、来る。

ナカヤマ　……帰ったの、彼女。

フジタ　ええ。

ナカヤマ　アツコが今日あんなふうなのは、君の彼女が出現したせいじゃないのか。

フジタ　彼女が気にしてるのはあなたです。

ナカヤマ　……。

フジタ　職員宿舎で初めてアツコに会ったとき、彼女はいったん帰ったのにほかのみんなを巻いて、待ち伏せされていたと言って、すぐに戻ってきました。あの時彼女は、あなたに会いたくて戻ってきた。そうでしょう。

ナカヤマ　そうなの。

フジタ　あなたはあなたで、わざと僕を残して牽制した。

ナカヤマ　そういうことになるのか。

フジタ　意識しあってるのに黙ってる。お互いの距離を崩さない。どこにでもいるんですね、そういう、大人なのか子どもなのかわからない、隠微な人たち……。

ナカヤマ　それがほんとうだとしたら、それを理解できる君も、同類だ。

トミ、来る。

トミ　……ちょっと一休みさせて貰うよ。

フジタ　……寮食のおばさん。

トミ　(誰か確認して)あんた。

フジタ　おむすびありがとうございました。

トミ　たいへんなことになってるよ。

ナカヤマ　……なに。

トミ　私映画観てたの。映研のテントで。楽しみにしてた『舞踏会の手帖』。我が青春の記念碑。そしたらね、途中でだーっと崩れてきちゃったんだから。

フジタ　崩れて？

トミ　バーンて、すごい音がして。爆弾が落ちたかと思ったよ。

フジタ　そんな。

トミ　映画やってる間に、誰かテントのロープと外柱、外しちゃったんだよ。跡は残骸だらけ。

フジタ　誰がそんなこと。

カイ、タナカ、戻ってきていて、

カイ　体育会だよ。そうに決まってる。

タナカ　体育会系サークルの連中。

トミ　映研のこと、ナカヤマ派サークルって言い方してたね。

ナカヤマ　何人ぐらいだ。

タナカ　百人くらいいたんじゃない。

カイ　そんなに多くないよ。

トミ　逃げるときはあっという間だったね。誰かが「警察だ！」って叫んだら、蜘蛛の子散らすようだった。

フジタ　反動勢力も、警察には弱いか……。

トミ　その誰かっていうのは、私。

サリフ、トシコ、ビラを手にしたハセガワ、セノオ、来る。遅れて、ワタナベ、フミ、サワダ、クボも来る。

サリフ　(インドネシア語)なぜ暴力。同じ日本人。同じ日本語。似た宗教観。なのになぜ。日本、仲間どうし対立する理由ない。

トシコ　いつも言ってることなんです。日本は民族も言語も宗教観も単一に近いと自分で言っているのに、どうして対立するのか。

サリフ　(インドネシア語)日本人の喧嘩、真剣ではない。僕は故郷で殺された人、見た。大勢、見た。

カイ　学友会を脱退するんじゃなくて、潰すほうで来たな。

フジタ　体育会の独立はほんとか。

ハセガワ　ビラが配られてる。

タナカ　「学友会の現状を憂慮する有志の会」。

フジタ　(見て)独立宣言か。

ハセガワ　ちくしょう。

セノオ　まだ大学祭、途中だっていうのに。

カイ　不穏な気配は感じてたんだ。

トミ　カイ君、タナカ君、二人は名指しされてたから、今度はこっち、襲撃されちゃ

うよ。

セノオ　映研の次はここか？

ハセガワ　とにかく、レポを増やそう。

クボ　レポ。

タナカ　見張るんだよ。

カイ　……体育会だけだと思うか。

ハセガワ　幹部以外の委員には、裏じゃ新サークル連合の準備会に加わってる連中もいる。ここにいないやつはだいたいそうだ。

フジタ　学生部の説得に応じたか。

カイ　全員が全員てわけじゃないだろう。

セノオ　臨時総会って何人学生が出れば成立するんだっけ。

タナカ　二五〇〇人。

カイ　できっこない。

ハセガワ　奴らのビラを見ると、二八〇〇集めて開催する目算が立っているという。

タナカ　ほんとに。

トミ　(ビラを見て)委員長をN教官のスポークスマンと断定、改選の動議を出すって。

カイ　(ビラを読んでいたが)「ナカヤマの金魚のフン」か、俺。

クボ　……もう行きましょう。

サワダ　それどころじゃない。

トミ　(ビラを見て)学友会を解散、「校友会」を設立。

フミ　新しいサークル連合。

ハセガワ　学生部の策謀です。

カイ　全サークルが交友会に移ったというのは事実の捏造だ。

ハセガワ　デマの戦法だよ。噂に後押しさせる。

ナカヤマ　……情けないな。機動隊も不当逮捕もなしで、切り崩されちまうのか。

サワダ　そのうち学生会館の屋上に日の丸が翻るぞ。

サリフ　(インドネシア語)大学祭の中で大問題が起きているのになぜ皆が関心持たない。

トシコ　一般学生の関心が薄すぎるって。

フジタ　(ナカヤマに)全学生に成績表を送ったらどうですか。君たちは零点である。

カイ　「緒方保子」名義で。

ハセガワ　ほとんどの学生が「そんな名前の先生いたかな」って、きょとんとして終わりだ。

フジタ　みんなだって「緒方保子」を知らないわけだろう。

セノオ　知らないよ。

カイ　いない人間だから当たり前。

フミ　私は実在すると思う。

トミ　あんたたち学生なのに考えが足りないね。(ナカヤマと目が合う)今日は特別だ。教えよう。「緒方保子」を逆さまにして読んでごらん。

フジタ　コ、スヤ……、タガオ？

サワダ　コスヤタカオ。

トミ　コスヤタカオ。寮の自治を守り抜いて死んだ、コスヤタカオ君の名前になる。

ナカヤマ　ああ。

フジタ・フミ　……あーっ。

フジタ　そんな単純な謎かけだったのか。

ハセガワ　……気づいてましたよ。

カイ　口にするのがはばかられたんです。

タナカ　そのくらいのデリカシーありますよ。
ワタナベ　(相手を否定する意図ではなく)センチメンタルすぎます。
ナカヤマ　そうか……。
トミ　学友会の作る大学祭は今年で終わりってこと。
ハセガワ　あきらめたわけじゃないですよ。
ワタナベ　もともと、あらざるものとしての〈非〉大学祭です。
サワダ　……孤立しちゃいけないんです、我々が。俺、京都行きます。
ナカヤマ　京都。
サワダ　天皇死んだ日にイベントやるって言ってたでしょ。京大西部講堂。
フジタ　ああ。
サワダ　歌舞音曲芸能は、表現の「自粛」を求められてる。それに対抗して、ミュージシャンやパフォーマーが集まって大騒ぎする。
カイ　映画監督の山岡さんは殺された。
ハセガワ　生きてる間に天皇の戦争責任を問わないと。
フジタ　だけど戦争責任だけを特別視してると、ヒロヒトが死んだら禊ぎすんだことになっちゃうぜ。
サワダ　死んじゃったら終わりか。
ナカヤマ　みんなその後まで続けられるか。就職して、自分の場所をつくって、その時にも今と同じこと、言えるか。

外で拡声器を通した厳粛そうな音楽とハウリング。落ち着かず立ち上がるサリフ。

カイ　騒々しいな。
サワダ　街宣車が来てるんです。昨夜、天皇を批判する劇を上演したと聞きつけて。
タナカ　こんな近くまで入れるなよ。
ワタナベ　もしも学友会がなくなったら、これからどうするんです。
ナカヤマ　(頷く)おまえたちは卒業ができる。俺には終わりがない。
ハセガワ　一生そのままのつもりなんですか。
ナカヤマ　……。
ハセガワ　……最初の二年間、あなたが嫌いだった。
ナカヤマ　今日一日、最後までやり通せ。
ハセガワ　はい。
ナカヤマ　困ってるのは向こうも一緒だ。……大学は俺一人を排除するのに、もう十五年かかってんだ。

外で拡声器を通した『海ゆかば』が流れて始めている。

セノオ　ちくしょう、うるせえな。
カイ　(覗いていたが)なんかヘンだぞ。
サワダ　(見て)体育会の連中、逆バリ張って、俺たちが出ていけないようにしてます。
タナカ　下手すりゃこっち入って来るぞ。
カイ　守らないと。
サリフ　(インドネシア語で)インドネシアでは、畳でたたかう方法がある……。
トシコ　インドネシアでは、畳でたたかう方法があるそうです。

一同、サリフと共に畳をバリケード代わりに並べる。
連絡係の学生、隙間をすり抜けるようにして駆け込んできて、伝える。

連絡係　学友会にミヤギアツコさんて、おられます。

フミ　アツコさん。

連絡係　ミヤギアツコさんが今……。

ナカヤマ　なんだ。

連絡係　ミヤギアツコさん、第三校舎の屋上から、飛び降りて。亡くなりました。

フジタ　……飛び降りた。

トミ　そんな。ひどい。

フミ　どうしよう……。

連絡係　消防車と警察が来てます。

カイ　……取り調べと称してこっちにも来るぞ。

ナカヤマ　……動くな。我々は、ここを動かずにたたかおう。

ハセガワ　……どうせ出られないよ。

サリフ　(トシコからアツコの死を聞き)死んじゃ駄目……。

ワタナベ　……全体の中から一人が欠けてしまったとき、「最後の一人までが全体である」、この命題は成立しません。全員をフォローできなかったら全体じゃない。死んでしまった人間を数に入れようというまやかしは、この命題を否定することです。これは挑戦です。ナカヤマさん。アツコさんが仕掛けたあなたに対する挑戦です。

ナカヤマ　……。

外の『海ゆかば』、高まる。
……カイ、モスラの歌を口ずさみ始める。
何人かが続く。
やがて全員が、モスラの歌を合唱する。
『海ゆかば』に対抗して、膨らんでゆく……。
歌いながら、畳を並べて壁を作る。
その畳と畳の隙間からスリット状に差し込む、外からの光。
その光だけ残して、不意に鎮まる……。

フジタ　ミヤギアツコの自殺の動機について、僕たちが語り合うことはありませんでした。……取り乱した様子もない覚悟の自殺だったこと。彼女の部屋に岡田有希子の大きなカレンダーが貼ってあったことから、一年遅れの後追い自殺と決めつける警察関係者もいたといいます。

鉄格子の影……。
金属が溶接され、取り付けられる音。

フジタ　全てのサークルは、新たにできた校友会に吸収され、学友会は大学当局の認可を取り消されました。事務局は数ヶ月後、ロックアウトされました。ナカヤマさんたちは最後まで強制執行に抵抗し立て籠もったそうですが、翌日未明の四時半、強引に外に出されたといいます。

タケダ　昔だったらまわりの学生が黙ってないんだけどね。

フジタ　学友会事務室は厳重に閉鎖されました。

タケダ　どんなふうに。

フジタ　ドアが溶接され、窓には鉄格子が取り付けられたんです。とにかく一刻も早く外から侵入できないようにしてしまいたかったんでしょう。それは一時の暫定措置と思われたんですが、ナカヤマさんが提訴した裁判で係争中ということもあってか、何もかもそのまま……。

タケダ　寮はどうなった。

フジタ　西山寮は九十年代に入って配電を受けられなくなり、それでもジェネレーターの自家発電で自主管理を続ける学生がいました。さすがに二十世紀は越えられず、取り壊されて、今は更地です。

タケダ　ナカヤマ教官はどうした。

フジタ　もう職員宿舎にはいません。

※　都営住宅・二号棟３０４号室（５）　※

その空間の奥、ユキエが台所にいるのがわかる。

ユキエ　お喋りばっかりでいいの。稽古休んで書いてるくせに。（ポットをフジタに運んでやる）ほら、コーヒー。もう流しとか使えないんだから汚さないでよ。

フジタ　ありがと。

ユキエ、携帯電話に出る。

ユキエ　なに、タックン。そうよ、わかってる。今日、パパ帰ってくるんだから。えー、ちゃんと片付けときなさいよ。……なに。土下座事件の子、もう学校来てるって。何、なんでパパに伝えなきゃいけないの、そんなこと。聞かれた？　へえ。（フジタに）聞こえたわよね。（電話に）あんたパパにいろんなこと喋っちゃうと、そのうちまんま芝居に出されちゃうからね。はいはい。じゃあね。

ナカヤマが来る。

ユキエ　さあ、何がなんでも今日は全部書き上げて出てって貰いますからね。明日鍵も付け替えるって話だし、私、嫌ですからね、不法占拠者の妻。……（ナカヤマに気づき）いらっしゃい。

ナカヤマ　あれーっ。

ユキエ　はい。
ナカヤマ　あの時の彼女でしょ。フジタ君についてきた。
ユキエ　え。えーっ？
タケダ　いらっしゃい。

フジタ、出てくる。

フジタ　ナカヤマさん……？
ナカヤマ　元気そうだな……、でもないか。相変わらず不健康な仕事。
フジタ　ほんとに来られたんですか。
ナカヤマ　だって、手紙に書いてただろう、どうせ今度東京行くから、できれば寄ってみるって。
フジタ　そうですけど。
ナカヤマ　東京も変わったな。地方出身者にはわかるまい。東京出身者が東京に里帰りする感じ。
フジタ　よく迷いませんでしたね。この辺、道ややこしくて。
ナカヤマ　ほんとうに来るとは思わなかったのか。君が書いてきたからだ。……あれから十五年、僕も四畳半を作ってみましたって。ただし期間限定……。今日までだろう。
フジタ　そうか。
ナカヤマ　……同じようなところに住んでるな。
タケダ　初めまして。タケダといいます。
ナカヤマ　四畳半の番人。
タケダ　はい。

携帯電話の呼び出し音が鳴っている。
タケダ、電話に出る。

タケダ　はーい。とんじいです。ぶー……。
ナカヤマ　君の芝居にそのまま出てきそうな人だね。
フジタ　……はい。
ナカヤマ　どっかで会ったことある。
タケダ　いいえ。（電話とナカヤマ、どちらに喋っているのか判然としない）
ナカヤマ　初めて会った気しないね。
タケダ　そうですかあ。（電話とナカヤマ、どちらに喋っているのか判然としない）
ユキエ　失礼ですけど、この人、既に締切を何度も更新しておりまして……。
ナカヤマ　なになに。
ユキエ　芝居の台本です。
ナカヤマ　そう。俺のこと芝居にするっていうから。
ユキエ　……はい。
ナカヤマ　カイ君に聞いたんだ。もと委員長。同級生の。
ユキエ　ああ。（誰のことかはわかる）
ナカヤマ　で、昔のレジュメとか、ビラは送った。少しでも参考になればと思って。
フジタ　芝居観て、怒らないでくださいよ。
ナカヤマ　それも面白いな。
フジタ　冗談。
ナカヤマ　かまわんよ。どうしたって、俺は、こうやって、存在してしまってるんだ。

フジタ　……。

タケダ　はーい。君の今日の動物はカバ。カバさん。だからひっくり返しちゃいけないよ。ぶー。

ナカヤマ　……ほんとに四畳半だ。

フジタ　ええ。

ナカヤマ　あのとき、四畳半が舞台のように見えた。ちょうどあの頃から、少しずつ変わっていった。

フジタ　最近はどうされてるんです。

ナカヤマ　調べてないのか。

フジタ　店を開かれた。

ナカヤマ　大学の正門前に、潰れたもと喫茶店を借りた。「学友会事務局」の看板をさげた。印刷機承ります、英語教室、ギター道場、雀卓も置いてある。飲み物は出さないし、まあ俺もいたりいなかったり。

ユキエ　来るんですか、お客。

　　　　ユキエ、いったん離れて片づけを再開する。

ナカヤマ　昔の仲間も消えた。今私が裁判を続けているのを知っているのは、(片手を開いてみせる)これだけもいないだろう。

フジタ　……もしも僕が、あの時の芝居をまたやりたいと言ったら、どうします。

ナカヤマ　四畳半の牢獄。

フジタ　ええ。

ナカヤマ　やるのか。じゃああの畳がいるんだ。

タケダ　だけど、その畳、まだあの中なんでしょう。ロックアウトされた、学友会事務室の……。

ナカヤマ　取りに行こう。

フジタ　どうやって。

ナカヤマ　中に入るんだ。

フジタ　溶接されてるんでしょう。鉄格子で。

ナカヤマ　クルマは出してね。最近のクルマはものがよく積めるだろう。

　　　　ナカヤマ、タケダ、フジタ、出てゆく。
　　　　ユキエ、振り返る。
　　　　誰もいない。

ユキエ　えーっ、どこ行ったの。

　　　　初めての、暗転。

※　暗闇の彼方　※

窓に嵌められた鉄格子を削るグラインダーの火花。
外れた鉄棒を引っこ抜いて入ってくる、ナカヤマ、タケダ、フジタ。
彼らが持つ懐中電灯の灯の輪が動く。

ナカヤマ　泥棒の芝居って、書いたことある。
フジタ　ないです。たぶん。
タケダ　こんなにあっさり入れるなら、鉄格子なんかいらないね。
ナカヤマ　……なんてことはない。
フジタ　なんてことはない。
タケダ　ただの部屋だ。
ナカヤマ　ただの畳だ。
フジタ　……十五年前の空気？
タケダ　覚えてるとおり？
ナカヤマ　四畳半か……。やっぱり正方形がいやだ。
タケダ　千畳敷に寝ても一畳。（ごろんと横になる）
ナカヤマ　ただ入ってきただけじゃ、もったいないな。我々が、闇の中の「畳」のその部分を照らし出すとそこに、奇跡のように待っている彼女の姿……、なんてのはどうだ。
フジタ　ああ……。
ナカヤマ　芝居なんだ、それくらいできないのか。
フジタ　今どき流行らないですよ、そういうアングラチック。
タケダ　そうでもないかもよ。

ドアを激しくノックする音。
しかし……、どのドアだろう、ノックが複数の場所から聴こえているようだ。
見回す、ナカヤマ、タケダ、フジタ。
やがて見えてくるのは、駆けめぐる、一つの影。
あらゆるドアを内側から叩いて回っている、アツコ。
追われているかのようだ。
自分の目の前にある架空のドアを開ける、ナカヤマ、タケダ、フジタ。
回っていたアツコ、勢い余って倒れ込む。

ナカヤマ　……鍵は掛かってないよ。何度言えばわかる。
アツコ　ごめんなさい。
ナカヤマ　アツコ君だ。

アツコ、しゃがみ込んだまま。

アツコ　すみません。（蹲る）
フジタ　……顔色、悪いですよ。
ナカヤマ　……またか。……またあいつ。
アツコ　（頷く）

ナカヤマ　……うん。
フジタ　追われているんですか。誰に。
アツコ　たぶん。
タケダ　ほんとうにそう？
アツコ　……。
タケダ　ほんとうにほんとうにそうなのかな。
アツコ　私……。
タケダ　はい。
アツコ　私……、追われてるんじゃない。待ってたの。
ナカヤマ　待っていた。
フジタ　誰を。
アツコ　……最後の一人を。
タケダ　最後の一人。
アツコ　（頷く）
タケダ　誰のこと？

　　ここに着いてから、フジタ、紙片に何か書き記していた。
　　ナカヤマ、フジタにその紙を渡される。

ナカヤマ　（読む）「誰が最後の一人かを確かめるためには、全体の枠組みが要る。一人を捜し出すために全体が必要とされるのだ。全体が大事なんじゃない。最後の一人が大事なんだ。最後の一人のために、全体は用意される」
アツコ　……ここはどこ。

フジタ　四畳半。
アツコ　どこの。
タケダ　四畳半は四畳半だ。
アツコ　なんであなたたち、いるの。
ナカヤマ　なんでだ。
フジタ　なんでだろう。
タケダ　なんでかな。
アツコ　……どうでもいいや。
タケダ　どうでもいい。
フジタ　どうでもいい。

　　一同、拍手する。

ナカヤマ　簡潔に言おう。たった今、授業は再開された。君が私を理解することを放棄した、その瞬間からだ。
タケダ　クク……。
アツコ　クク……。
フジタ　クク……。
ナカヤマ　クク……。

　　静止。

……やがて、暗転することなく、四人は立ち上がり、お辞儀する。
他の出演者も舞台上に出てきて、もう一度、お辞儀する。
やがて、ほとんどの出演者は舞台から退場する。
一部の出演者はそのまま客席に向かい、帰路を誘導したり、預かった荷物を返したり、それぞれの仕事をする。

劇中、岡山大学学友会にまつわる資料、坂本守信氏のコトバを中心に、引用・参照させて頂きました。